

---

# 偉大なるサラ様の恋愛事情

神之宮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

偉大なるサラ様の恋愛事情

### 【Nコード】

N8610W

### 【作者名】

神之宮

### 【あらすじ】

事故で死んだ私はある日伯爵家のお嬢様に憑依。あれよあれよと5年の歳月が過ぎ、何故か騎士団のお世話をしなくてはならない羽目に。そこには噂の『黒騎士』の団長さんまで居て。何故か迫られている自分の今の状況が分からない。誰か分かりやすく説明プリーズ！ついでに助けしてくれるとありがたい！！

憑依しました。そして面倒事発生です。(前書き)

憑依しました。そして面倒事発生です。

『キキーツ』ドントツ。

えー。20xx年 月 日、23時42分35秒。 病院にて息

を引きとつた女性がいた。

彼女の名は福井静香<sup>フクイシズカ</sup>27歳。会社員。信号無視のトラックに運悪く突っ込まれた不運な女性。それが私だ。

そして、何故私が自分の死について知っているかというのだ。まあ、簡単に説明すると。神様だか、管理者だかしらん方々が出てきて、今回の事故は私たちの責任です。なんて言うもんだから。

ほんで、まだ死ぬ予定ではなかったのに死んでしまった私は、丁度いいタイミングで同じく死んでしまった少女に憑依と云う名の転生をしてほしいと頼まれ。（身体に戻すにしても、私の身体はトラックに轢かれグチャグチャのため戻れず）仕方なしに、ある幾つかの条件と共に少女に憑依をすることと相成ったのである。

そして、当初私は10歳くらいのとある伯爵家のご令嬢。名をサラサ・セナ・サルメリア。黒に近い濃い藍色のストレートロングの髪に同じく藍色の瞳をもつた可愛らしい女の子に憑依することになった。

すでに両親を亡くしていたものの、残っていた家具やら別荘やらを上手く売りさばき（今までは手入れをしていただけで放置していた）、財産が4・5倍になると雇っていたメイドやら執事やらの用人等を高給で実家に戻したり、仕事を紹介したりと近辺の整理を行った（私一人しかないのに、そんな沢山使用人が居てもしょう

がないでしょう。)

城から一番近い場所の街の外れにある森に、それなりの大きさの屋敷1つだけを残し、あれから5年。執事2人とメイド3人、それなりに色々とあったが趣味で小説を書いたり、音楽を楽しんだり、ギルドへ行きちよつと稼いだりと、現在15歳(中身33歳)にして何不自由なく楽しくのんびりと平和に暮らしていた。

……そう。悪友ともいうべき知人。レオナード・オーデンバークが今日という日に訪ねてくるまでは。

「お願いだ、サラ！力を貸してくれないか。」

早朝からうちに訪ねて来て、そう切り出したこの男。この国でも1・2を争うほどの剣の使い手。しかも、あの『紅の騎士』の団長様であらせられる。名をレオナード・オーデンバーク27歳。紅い髪と瞳の身長186？もある男である。その団長様が私に何の用かという事。

「この間のボヤ事件で騎士団の寮の一部が半壊しちゃってな。昨日遠征から帰ってきた奴等を含めると、どうしてもあと数人分の部屋がないんだよ。自宅から通える奴や近くの宿屋なんかをお願いして通わせたりとなんとかやったんだが、城の近くの宿屋なんて限られ

てくるからあまり、部屋もなくてな。しかも、騎士団やってんだ。休める時に休ませないと生半可な仕事じゃないからキッチンと休める場所がほしいんだ。」

ここまで聞けばこの男が何をいたいのか聞かなくても（嫌でも）わかる。

「つまり、城に最も近く、尚且つ暖かい寢床を与えられる場所にここを選んだわけですか。」

「そうだ。引き受けてくれるか。」

「いやです。」

考える間もなく即答した私に、レオナードは呆然としてから、ガツと勢いよく立ち上がると。理由を問いただした。

「何故だ!」

「面倒だからに決まっているでしょう。何を好き好んで面倒事を引き起こしそうな奴等を家へ入れなければいけないんです。私が面倒事嫌いなことはよくご存じですよ。レオン殿。」

「ああ。だが、お前が心配するような事は起きはしない。だから、よく考えてくれないか。それに、タダでは言わん。寮費はもちろん飯代も出す。困ったことがあれば俺に言え。」

そこまで言うレオナードは、本当に部下の事を想って言っているのだと思うと、強く言うことが出来なかった。だからだろう。思わず自分の口からでた言葉に自分で驚く羽目になったのは。

「分かりました。」

「本当か!？」

「……ええ。しかし、条件があります。それを守れるのでしたら、

ここに住まわせましょう。無理なら他を当たってください。」

「ああ！助かる、サラ。条件はなんだ。」

レオナードは落ち着きを取り戻し、また椅子へ腰掛けると条件を聞き出した。

「難しい事ではありません。条件は4つ。これを守って頂けたら結構です。」

レオナードの憂鬱と希望（前書き）



## レオナードの憂鬱と希望

レオナードSide

今日一日俺は憂鬱というしかなかった。何故なら先日城内の騎士寮にてちよつとしたボヤがあり、火を消そうとした魔術師が新米だったからなのか。力の加減を誤り、燃えてない部屋にまで水（というよりあれは洪水だな）を起こさせ、寮の一部が半壊となったのは記憶にまだ新しい出来事だ。

そして、その事故はちよつとしたボヤ事件で収まるはずが、部屋の崩壊のおかげで、今日帰って来る騎士団の部屋の調達がまだ出ていなかった。この事態を何とかする為に俺は朝早くから、その対処に追われていた。実家から通える者達は実家から。そうでない者たちでも近くの宿屋に話をつけて部屋を貸してもらい、通えるよう手筈を整えた。

しかし、あと残り少しというところでもう宛てがなく、途方に暮れていたところに懐かしい気配を自分の執務室のドアから感じ、思わずニヤリと笑い、次にノックがされた。

コンコン

「入れ。」

「失礼する。」

そう言つて、部屋へ入つて来たこの男は先の遠征に行つていた『黒騎士』の騎士団長。シエナルド・ドルテ・オーデンシュバンク（25歳）銀髪に赤紫の瞳をもつこの男は若くしてここまで上り詰めた本物の実力者だ。冷たく容赦なく敵を追いつめる姿に『氷結のシ

エナ』の異名までつけられている。

久々の（他の奴等からして）何を考えているのか分からない無表情を見やりながら、再会を喜ぶ。

「先での遠征お疲れ。どうだった。シレビアとの国境は。」

「そうだな。少しの小競り合いはあったが、今のところシレビアとの間に大きな動きはない。」

「そうか。まあ、ホントお疲れ。ゆっくり休んでくれ。と言いたいところなんだが・・・」

「ああ。先日の火事の事ならここに来てすぐ知らせが入った。軽いボヤだと聞いたが？」

そう、尋ねるシエナルドに苦い顔で俺は今迄のことを掻い摘んで聞かせた。

「と、言うわけで帰って来てそうそう悪いんだが、荷物を運びいれるのもう少し待ってくれないか。」

「それは、構わないが。あと、何人残っているんだ。」

「あと、5人といったところか。」

「では、俺を含め残りの4人を此方の団員から出そう。」

「何言ってるんだ！お前らは遠征から帰ってきたばかりだろう。そんな事させられるか！」

「だが、此方が動けば時間の短縮にはなる。」

「確かに、そうだが。住むところはどうするつもりだ。もう近くの宿屋はないぞ。」

「…そこは、こちらでもなんとかしよう。」

「どの道時間がかかりそうだな。」

「しかし、そう悠長に構えてもいられまい。明後日には城で夜会が行われる。警備を厳重にするためにも、こんなことに時間を割いて

はいられない。」

「はあ。そうなんだよなー。もう、いつその事どっかにでっかい屋敷かなにかに住まわせてくれるようなやさしいお貴族様はいないもんかねえー。」

「…何を馬鹿なことを」

「だよなー。そんな都合のいいこと聞いてくれる貴族なんて…。」

言葉の途中で不自然に止まった俺をコイツは訝しげに見る。それを、見ながら俺はある人物を思い出していた。コイツも貴族だが、全然驕ることをしない。変わった奴だと思っていたが、それでも俺はコイツを認めていた。そして、コイツの他にも貴族らしからぬ奴を思い出したのだった。そいつは確か此処からそう遠くない森の中の屋敷に住んでいる。そう、思うと同時に俺は口元をあげた。そんな俺を見て奴はなおさら眉を潜める。

「シエナルド。どうやら、この問題も早々に解決しそうだ。」

「どうゆうことだ。」

「なに、まあ。明日を待っていてくれ。どうにか説得してみっから。」

その後、お互いに残っていた仕事を片付ける為にお開きとなった。そして、俺は明日の朝一番にあいつの処へと行き、どう説得するかを考えてその日を終えた。



サラとの出会い（レオナード編）（前書き）

更新は地道に頑張っていきたいと思います。暖かく見守ってください。

## サラとの出会い（レオナード編）

レオナードside

俺は今朝早くサラの家を訪ね、条件付きではあるが、なんとか家を貸してもらえることに成功した。サラは信用に値する奴だ。しかも、サラはああ見えて普通の15歳のお嬢様ではない。そう思ったのはサラと初めて出会った頃からの印象だった。

今から2年前、サラを初めて見たのは城下町の細い路地裏。誰も居ない薄暗いそこで、サラは5・6人のゴロツキ達に絡まれていた。どうして、こんな薄暗い路地に身なりのいい明らかにお嬢様風情とした子がいるのか不思議に思いはしたが。そこにたまたまフラリと立ち寄ったのも偶然で、俺はすぐには駆けつけず、その様子を少し窺っていた。

「お嬢ちゃん。随分いい身なりしてるじゃん。ちょっとお兄さん達お金に困ってるんだけど、恵んでくれないかな？」

「「「ぎやははは「「「

「むしろ、どこかに売り飛ばすか。…良く見たら結構可愛い顔してんじゃない。」

「それも、ありだな。「「「「ぎやははは。「「「

下品な笑い声をききながら、これは早めに助けた方がいいだろうと判断し、輪の中へ入ろうとしたその時。見るからにとってもお上品なお嬢様から出たとは思えない、低い声と不思議な威圧感でこれまたとんでもない言葉を吐きだした。

「うっぜえーな。さっきからピーチクパーチク騒ぎやがって。こっ

ちとら徹夜の仕事が終わって後は家帰って寝るだけって時によ。てめえーらみたいに昼間っからこんなところで油売ってる暇なんざないんだよ。あたしは早く帰って寝たいんだ。つかマジ寝かせる。どんだけ寝てないんとおもってたよ。今から私の安眠妨害してみろや。マジ許さねえー。完膚無きまでに叩きのめしてやる。ストレスもたまってるし。これ以上怒らせんなや。」

「くくくくく……………」「くくくくく」

一同啞然。俺も踏み出そうとした格好のまま固まってしまった。なんなんだ、この嬢ちゃんは……………威勢がいいにも程がある。

そんな中、我に返ったゴロツキの一人が真っ赤な顔して怒鳴り散らした。

「ふざけんなよ。嬢ちゃん。こっちが下手にでてりゃあ、調子に乗りやがって。ちょっと痛い目にも見てもらおうじゃねえーか。」

「はっ！どこが下手だよ。十分上から目線だったじゃないか。まあ、いいや。丁度こっちもお前らのせいでイライラしてきたんでね。ストレス解消にでもお手伝いいただこうじゃないか。」

「くくくくそつが！！やつちまえ！！！」

「くくくおう！！」「くくく」

これはヤバイ。そう俺は瞬時に思った。相手はどう見ても男のゴロツキ5人だ。そんな相手をお嬢ちゃん。しかもまだ、13・4くらいなのだ。どうあつても力の差は歴然としている。俺はこんどこそ輪に入ろうと身体を動かした。

が。バキッ

「ぐはっ!」「  
ベキッ

「ぐふっ。」

ドコッ

「ぶふあっ!」

次々と倒れて行くゴロツキを目にしながら、今度は開いた口がふさがらなかった。

「(なんなんだ。これは...)」

最初の男2人の懐に瞬時に入り腹の溝内に肘鉄と蹴りを喰らわせ、次の男の拳を右に避けるとそいつの腕を掴み右脚の先を踏みつけ前に倒れ込むように促し、それを利用して掴んだ右腕だけで男を地面へと投げつけた。次の男も同じく拳を振り上げるが、先にお嬢ちゃんが懐へと入り、素早く胸倉を掴むと男の右腕を抱え込みながら背を向け、勢いを殺さず、後ろ左足で男の左足を払うと、男を抱えながら投げ飛ばした。

どれも、見たことが無い体術のようで屈強とまではいわないが、それなりの体格を持つ男達を女の子。しかも、子供にのされている姿は異様でしかない。しかし、その体裁きは見事で思わず見惚れるほどだ。そして、ゴロツキの最後の男がこの異様さに今更気がついたのか脅えた顔で逃げ出そうと踵を返そうとした。

「うっわわあ!」

「逃がさないよ。最初に喧嘩を売ってきたのは君たちだからねW最後までお付き合い願おうか。」

そんな、悪魔の囁きと共に上へ飛び上がると、逃げ出そうとした



男の前に着地。逃げ道をふさがれた男は気が動転しながら、そのまま嬢ちゃんへと飛びかかった……が、嬢ちゃんはそれを静かに見つめながら左足を軸に右足で男を勢いよく蹴りあげた。

「グハツ！」

……最後の男が終わると子供は手をはたきながら、この路地を後にした。

結局俺は最後まで呆然とその後ろ姿をみながら、嬢ちゃんが何者なのかをひたすら考えていた。そしてその疑問が解かれたのは、あの出来事から間もなくの事だった。

任務で結構な怪我を負った俺をこの間見かけた嬢ちゃんによって拾われ、助けられたからだ。屋敷が城の近くの森の中である事を知り、嬢ちゃんが何者なのか。なんて調べるまでもなかった。城の近くの森に屋敷を持つ家は一つだけだ。一時期噂にもなっていた。

「秀才にして鬼才の稀なる力を持ったご令嬢が居る。」それが、目の前に居るサラサ・セナ・サルメリア。サルメリア家の一人娘だ。しかし、サラサの両親は彼女が10歳の時に事故で亡くなっている。爵位は従兄のサイレントに譲り、サラサは両親の残した財産で生計を立てているようだった。

まあ、そんな縁で図々しくも色々頼みごとをしたり、連れ回したりしているうちに今じゃ友人として何度かサラの家を訪れるようになった。しかし、今回の件引き受けてくれてホント助かった。あとは、シエナルドに報告して今日のお昼になる前からでも、荷物を運び入れてもらうことにしよう。

ついでに、俺も行くのか。昼飯をあやかりに行くのもいいだろ。

最近は忙しくてゆっくり食事もとっていないかった。サラが作る飯は全て珍しいものばかりだが、めちやくちや上手い。……よし、今日の飯はサラ宅で頂こう。

そう、上機嫌に城内の廊下を歩く姿を多くの人に目撃されていた。それに、まったく気付かず今日のお昼を楽しみにするレオナードであった。

## in 城 サラへの興味。

in 城

「と、言っわけで。条件付きだが、此処から通える場所を見つけてきたから。昼前までには準備を整えておいてくれ」

レオナードは城に着くとすぐにシエナルドのところを訪れ、今朝の出来事を簡単に説明した。

「へー。本当にあのサルメリア家の屋敷に住まわせてくれるんですか？レオナード隊長。」

「ああ。サラの屋敷は今こそしかないからな。」

「だが、俺らみたいな平民と一緒に暮らすなんて嫌だろう。」

「条件と言っても無理難題なやつじゃないでしょうね。」

そう次々と質問をしてくるのは、『黒騎士』の隊員で、今回サラの屋敷に住む奴らだ。上からマリック（19歳）オレンジ頭でブラウンの瞳。猫毛で、この中では一番若い。次にフラウ（26歳）こげ茶の髪で、下の奴等をまとめる兄貴分。最後はランドール・ドラバルタス（22歳）貴族だが、あまり平民の奴等と変わらない。それぞれの質問に俺も丁寧に答えて行く。

「どれも心配ない。サラをそこら辺の貴族のお嬢様と一緒にしていると痛い目見るぞ。アイツは見かけこそ大人しくてお上品に見えるが、実際中身が15歳とは思えないくらいに達観してやがる。しかも、平気で下町に出ておっちゃん等と何やら語り合ってるは、ギルドに行つて荒稼ぎしてくるは、果てには副業のモノ書きでそれなりの収入を得てるんだぞ。下手したら俺らの給料くらい軽く稼いでるぞ。」

あいつ。条件もそう構えずともいいものばかりだ。」

隊員たちはそう話すレオナードの言葉にどれも驚きを隠せず、目を見開いていた。

「えっと、確かアルメリアのお嬢さんは今年15ではなかったですか？」

そう、困惑気に聞いてくる男はフラウ同様後輩たちに好かれていた。カーネル・バンク（26歳）金髪碧眼のさわやか美男子だ。やさしさあふれる笑みで世の女性たちに人気の人物だ。

「そうだが？」

「その、まだ、15歳の少女が働いてるんですか？伯爵家のご令嬢が？」

「そつだ。何か問題でもあるのか？」

「……………」

「（問題もなにも、信じられないと言ったところか）」

冷静に周りの心境を把握すると、軽くため息を吐いた。

「お前ら、サラの家のことでの程度知ってるんだ。」

「……………」

しばらくの沈黙の後、ポツリポツリと話し始めた。

「確か、サルメリア家は先先代での王妃のご実家でしたね。」

「それに、サルメリアは代々何かしらの才能に恵まれていて、この国に多くの貢献・功績を残しています。」

「現在の屋敷はその功績の証として、先代代の陛下から与えられたものだ。」

「そうだ。だが、5年前にサルメリア夫妻は事故で亡くなり、爵位はサラに行くがサラは女だ。爵位を継ぐことはできない。だからサラは爵位を従兄のサイレントに譲り、サラは一人で数人の使用人を抱えて生活している。ほとんどの使用人には高給で実家に帰したり、新しい仕事場探してやったりしたんだと。使っていればそのうち両親が残した財産も無くなる。ならいつそ今から出来る限り稼いで、そのうちのんびり隠居でもするんだとよ。」

「……聞けば聞くほど。15歳とは思えない行動ばかりですね。」  
「しかも、それ実行したの10歳のころだろ？どんだけだよ。俺でも流石に10歳でそんな事出来るかって聞かれたら無理だと答えるね。うーん。俺ちょっとその嬢ちゃんに興味湧いて来たかも。」

「中々面白そうなご令嬢ですね。私もお会いしてみたくなりました。」

そう、楽しそうに話すこの2人はこの副団長のルドルフ・サルタ・セルバーン（25歳）紅茶の髪と瞳のチャライ男。女と酒が趣味な奴だが、その剣の腕は『黒騎士』の中でも2番目に強く、仲間からの信頼も大きい。次にやさしそうな笑顔を浮かべる眼鏡のコイツは同じく副団長のクラウド・バルセロッタ（25歳）茶髪にブラウンの瞳で神父様のように見える顔だが、実際のところこの中で一番侮れない奴でもある。

「隊長。私たちも同行してかまいませんか？」

今まで、俺達の会話を静かに静観していたシエナルドはクラウド

に目を向けると今度は俺に視線を向けた。俺はそれに苦笑しながら頷く。

「いいだろう。では、2時間後にサルメリア家を訪れることにしよう。それまでに各自準備をしておけ。」

シエナルドが静かに指示を出せば、皆がその返事を返す。それを眺めていたレオナードだが、そう言えば例の条件の内容を話していなかったと気付き慌てて説明を行った。それに対してのそれぞれの反応に苦笑を禁じ得なかったのもなんだが。

その後は、それぞれの準備に取り掛かり、また門のところで落ち合うようにした。

i n 城 サラへの興味。(後書き)

またも、レオナード視点になってしまった(ー・ー・)

## リリネット事件

今朝頼みごとに来たレオナードが帰ってから、すぐに後ろの扉から執事が表れる。執事に今回の事情を話し、急ぎ準備整えるよう指示を出した。

「サラ様。では、どれほどの者が何時頃来られるのでしょうか。」

「…確か5・6人と言っていたような気がするわ。取りあえず、7つほど用意していれば問題ないでしょう。彼らはお昼前には来るそうですよ。昼食の支度をお願いね。セバス。」

「賜りました。」

「ああ。きつとレオン殿も昼食はこちらになるでしょうから。用意を。」

「はい。」

そういつて下がる有能な執事は我が家に古くから仕えてくれる執事長のセバレス・トワール（40歳）セバスはこの屋敷においても素晴らしく有能だ。何でもそつなくこなしてしまふ。あと、もう一人有能なメイド長がいる。イザベラ・ナイヴ。（40歳）こちらも両親の代から仕えてきている。2人にも勿論帰省を促したが、どうあつても私に仕えて行くと言うのでありがたいことだと思いつながらこの5年を過ごしてきた。

「サラ様。お茶のおかわりはいかがですか。」

「いいえ、もういいわ。ありがとう。イザベラ。私はこれから残りの原稿を仕上げます。昼食の用意が出来たら呼んでちょうだい。」

「畏まりました。」



イザベラを下がらせ、自室へと踵を返した。原稿というのは私が今手がけている小説の続編だ。内容はぶっちゃけ現世の『ルン世』。だったり『コン』だったりをこの時代に置き換えて書いている。ジャンルも様々だが、主に書いているのは、推理小説と恋愛小説の2つだ。どの作品もかなりのヒット作になっていて、おかげで今のところ両親の財産を使わずとも暮らしていけるくらいの収入がある。そんなこんなで、今書いている作品を仕上げていると。突然イザベラともう一人のメイド。アンナの悲鳴が響き渡った。

「きゃー！！！！」

私は声がする外へと急いで駆け付けると、そこにはセバスもいて少し青ざめた顔をしている。

「一体どうしたの。」

「サラ様。リリネットが……」

リリネットというのは私のメイドの一人で今年13歳になる可愛い女の子だ。メイドのアンナとロゼッタというもう一人の執事の娘だ。セバスの様子から事態は深刻だと判断し、状況を尋ねた。

「リリーがどうした。」

「上を……サラ様」

セバスに言われて視線を上へ向けると、そこには今にも屋根から落ちてしまいそうなリリネットが見受けられた。それを見て、私もセバス同様青ざめる。

「リリー！！一体どうしてそんなところに。」

そう叫んだと同時にリリネットの掴んでいた両方のうち片手が外れた。

「いやああああー!!リリネット!!」

母親のアンナが悲鳴を上げる。早くなんとかしなければそのうちリリネットが落ちてしまう。落ちたらただでは済まない。上に行つて引き上げる時間はあの様子だとな。どうする。

その時サラの目に一羽の鳥が目に入り、その鳥は高く跳びあがっていった。それと、同時に大声をあげ、リリネットを見つめた。

「リリー！もう少し頑張つてちょうだい。今助けるから、私がくるまで頑張るのよ!!」

「サラ様。一体なにを……」

「皆はそこをどいてちょうだい。そして、私から少し離れて。」

皆はリリネットに目を向けながら、すばやく場所を譲り、少しの距離をとった。サラはそれを確認すると、魔力を練り、集中する。十分な魔力を練り込んだら、久々に使う日本語で『翼』と空中に書き発動させた。サラの周りが一瞬光が強くなったかと思うと。次の瞬間サラの背中には純白の羽が2対ついており、それに呆然としている執事やメイドを放り、リリネットのところまで一気に飛び上がる。

「リリー!!」

「サラさま~~~~」

あと少しでリリーを捕まえられるというところで、リリーが限界を迎え、もう片方の指先が屋根から外れてしまった。真つ逆さまに落ちて行くリリーに緊張が走る。

「きゃつ。」

「リリー！！」

「リリネット！！」

いそいで私はスピードを上げ、落ちてくるリリネットの身体を空中でなんとか受け止めた。腕の中のリリネットは青ざめた様子で、だが衝撃が来ないのを感じ、そつと目を開ける。その様子を見て、なんとか無事であったことに安堵した。

リリネット side

リリネットが目を開けた時、目に入ったのは純白の羽をはやした尊敬してやまないサラ様の安堵した顔だった。一瞬なんの夢もしくはお迎えが来たのかと思うくらいにそれはそれは美しかった。今の状況をしばし忘れ、見惚れてしまいうくらいに。

「何処も怪我はない？リリー。」

そう、やさしく声をかけてくださるだけで、リリネットは感激の極み！！！そんなやさしくてお強いサラ様に今日は存分なご迷惑をおかけしてしまいました。このリリー！！一生の不覚！！敬愛するサラ様の妨げになるなど、サラ様のメイドとしてなんたること！！！そう申し上げれば、サラ様は綺麗に頬笑みながら

「リリーはよく頑張ってくれているわ。これからも、私の側に居てちょうだい。」

ああ！！なんたる殺し文句！！メイド殺しですわ！！もう、一生お仕えいたします！！サラ様——！！

しかも今の今まで気付かなかったのですが、私サラ様の腕の中にいます？……ああ！！神様。今日はなんて素晴らしい日なのでしよう。サラ様に、サラ様にお、お姫様だっこしていただけなんて——！！。

そして、私は興奮のあまりそのままサラ様の腕の中で気を失ってしまった。

(終)

腕の中で気絶してしまった。リリーを抱えながら静かに地上へと戻ると皆が急いで駆け寄ってくる。

「リリー——！！」

そう叫ぶ男の声はリリネットの父ロゼッタの声。ロゼッタは顔色

を変えながら、こちらに駆け寄ってくると、私の腕の中のリリネットの様子を見て安堵のため息を吐いた。それに母親も加わり、涙ながらに御礼を言われる。

「うつつうつつ。サラ様。ありがとうございます。娘を助けていただいて。」

「これくらい大した事ではないわ。リリネットに怪我がなくて良かった。」

「サラ様〜〜。」

「ああ〜。ほらほらそんなに泣いては、瞳が腫れてしまっわ。アンナ。泣き顔も素敵ではあるけど、私は貴女の笑った顔の方が好きよ。」

「……はい／＼／」

照れるアンナに笑いかけ、今度はロゼッタに視線を向ける。

「リリネットをあまり叱らないでやって、ロゼ。」

「しかし！！サラ様。このようにサラ様のお手を煩わせるなど……」

「先ほど気絶する前に、謝罪は受けたわ。もう十分よ。それより、早くリリーを部屋へ、ロゼはリリーを運んで。アンナ、リリーについていなさい。」

「しかし、サラ様。まだ仕事が……」

「今日はいいわ。それより、こんな状態のリリーでは起きた時に不安がるかもしれない。側に居てあげなさい。」

そう言って、二人を屋敷へと戻し、羽を消してセバス達に仕事に戻るように指示をだす。しかし、セバス一人が残り、どうしたのかを聞くと。

「サラ様。あちらのお客様の案内をいたしますので。」

セバスが示す方へ視線をやるとレオンを中心に、言われていた人数よりも若干多いのに気付कि、少し眉を潜めたが、すぐに表情を戻しセバスへ向き直る。

「セバス。ここは私が案内をしておくわ。貴方は増えた人数分の部屋の用意をお願い。」

「しかし……」

「心配はいらないわ。広間にお通しするからお茶の用意だけお願い出来るかしら。」

「…畏まりました。」

そうやって、踵を返すセバスを見送り、改めて今日から世話をしなくてはならない騎士たちへ向き直おった。

## リリネット事件（後書き）

リリネット、かなりサラ様に陶醉してますwリリネットがそのうち  
変態になってきそうな予感……。

サラ様の趣味の一つ。？

シエナルドside

「ようこそ。我がサルメリア家へ。当主のサラサ・セナ・サルメリアです。さつそくですが、皆さんを応接室までお連れ致します。荷物は後ほど執事が部屋まで運び入れますのでどうぞそのまま玄関に置きください。」

振り返った彼女がそう淡々と述べられる事務的な言葉。先ほど見た姿がまるで幻を見たかのように感じられる。あの子供や使用人に向けられた慈愛に満ちた表情は、今やなりを潜め、私たちに向けられているのはあくまで他人行儀な笑顔。それを此の上なく面白くないと思う自分がいる。そんな自分に少し疑問を覚えながらも、特に気にするでもなく。こちらも型式ばった挨拶を軽く交わす。

「此の度は、こちらの都合でしばらく厄介になる。『黒騎士』団長シエナルド・ドルテ・オーデンシュバンクと、その他隊員たちだ。何かと迷惑をかけるかもしれんが、よろしく頼む。」

「いいえ、こちらこそ。事情はそちらのレオナード隊長から聞き及んでおります。では、皆さんこちらです。」

そう踵を返す彼女の後を団員で付いて行きながら、屋敷へと踏み入れた。

(終)



クラウドside

玄関に踏み入れた途端何人かが息をのんだのが分かった。

「すっげー。」

素直にその声を出したのは、私の隣に居るマリックだ。確かにマリックの言うとおり凄い。何が凄いのかと言うと、玄関だけでも広い空間があった。それに、どこぞの貴族のように豪華というわけではなく、見ていて落ち着きのある上品さがあり、一目で上質なものと分かる。そんな空間だった。所々にちょっとした花瓶や陶器が置いてあり、それもこの空間に上手く馴染んでおり、主の趣味の良さが窺える。

「なんか、割つちまいそうで歩くのが怖くなるな。」

そう呟いたのは私の前に居るフラウだ。確かに、この花瓶一ついくらほどの価値があるのか。所詮庶民である。私には皆目見当がつかない。しかし、見るからに上品な作品に相当高いのではないかと密かに思っていると、前を歩いていたご令嬢が突然笑い出した。

「クスクスクス。」

皆どうしたのかとその彼女を見れば、肩まで揺らしている。何がそんなにツボに入ったのか。皆首をかしげるばかりだ。やがて笑い

の波が収まったのか、少し紅い顔をして楽しそうに弁解を始めた。

「失礼しました。屋敷周辺に飾られている花瓶や壺は私自ら作ったものです。ですので、そう高価なものではありません。お気になさらず手にとって頂いてもかまいませんよ。……勿論割ってしまっても、咎めたりいたしませんので。悪しからず。」

どうやら、フラウの独り言は彼女にも聞こえていたらしい。フラウはややバツが悪そうな顔をして頭を掻いている。しかし、この花瓶や壺類が皆彼女の手製。シエナルドもこれには驚いているらしい。めったに表情が出ないあのシエナルドがここまで分かりやすいリアクションをとるのはホント珍しいことだ。しかし、よくできている。後ほどよく見させてもらおう。

彼女は玄関を真っ直ぐに抜け、すぐ左の扉を開けた。

「どうぞ。もうしばらくこちらで休んでお待ちください。あと1時間ほどで昼食の時間ですから。部屋への案内はその後になります。」

そう彼女が案内したのはこれまたさり気無い上品さを保った部屋だった。しばらくすると侍女が入って来てお茶を入れ下がって行った。私は静かに周りを観察し、玄関と同じ種類の花瓶やら壺やらを見つければ側による。それをじっくり見ていると突然後ろから声をかけられた。

「手にとって触って頂いてもよろしいですよ。どうぞ。」

そうして、彼女から手渡された壺を見る。真っ白い。しかし、どこか青白さを称えたこの不思議な陶器が本当に人の手によって作られたとは思えないほどの素晴らしさだった。余りにも私が真剣に壺

を見ていたせいなのか、彼女はとんでもない事を言ってきた。

「なんでしたら、御一つ気に入ったのを差し上げますよ。」

「えっ！いや、しかし。」

「どうせ、私が見つけたモノです。何気にまだ沢山ありますから。それに私は多趣味な者で、あれこれと手を出しては大量に作ってしまった置き場がなくて困ってもいるので、一つでも貰ってくださると助かります。」

「あ、では……この壺を一つ頂いてもいいでしょうか。こんなに素晴らしいモノを見るのは初めてでして、思わず見惚れてしまいました。なめらかな肌触りに、このバランスの取れたデザインがまたいいですね。壺とか花瓶などに特に興味も無かったのですが、これは素晴らしいと思って見てしまいました。」

「お褒めに預かり光栄です。そのように評価していただけたとは思ってもみませんでした。御一つだけでよろしかったですか？」

「ええ。ありがとうございます。大切にします。」

「では、これをしまうモノを持ってきますので少しお待ちくださいね。」

「すみません。お気を使わせてまして。」

「いいえ。私の作品を過大評価して頂きましたし。それに、何かを造ってその人に喜ばれる事は作る側にも嬉しいものですから。」

私は思わぬ戦利品に今日は団長について来て良かったと心底感謝した。そして、それを遠目から見ていたマリツクや他の男達が羨ましそうに見ているのに気がつき、苦笑を浮かべた。

「いいなー。」

そうぼそりと言うマリツクの声が彼女にも聞こえたのか、マリツク

ク達に顔を向け笑顔で言った。

「では、他の方も御一ついかかですか？」

「……いいのか？俺達も貰って。」

「ええ。勿論ですよ。ほとんどが私が趣味で作ったモノですから。

貰って使って頂ければ。職人明利に尽きます。なんでしたら、他の部屋のモノも見てみますか？選んだモノはこちらに持ってきて頂ければ御包みますので。」

「サラ！俺も欲しい！！」

「はいはい。レオン殿は他の方を部屋へ案内でもしてテキストに何か持ってきてください。ただし、陶器だけです。」

「おう！！まかせろ。ほら、行くぞシエナルド。」

「……俺も行くのか。」

「当たり前だろう。ほら、早く行かねえーと。時間がなくなるだろう。」

「……はあ。」

サラ様の趣味の一つ。？（後書き）

次もクラウド視点

サラ様の趣味の一つ？

クラウドside

シエナルドもレオナード隊長に連れられて部屋を出た。私は彼女と2人軽く談笑しながら彼等が戻ってくるのを待った。そうして彼等が部屋から出て20分ほど、それぞれが最初の応接室に集まり何かしら物を持っていた。しかも、レオナード隊長に釣られてシエナルドまで何か持っている。

「クツ」

その姿に思わず吹き出しそうになるのをなんとか堪え、視線を急いで逸らすと。彼女が皆が持ってきたものを一瞥し嬉しそうに微笑んだ。その姿に少し見惚れながら、慌てて思考を切り替える為に彼女が何をしているのか訪ねた。

「何をしているのですか？」

「いえ、皆さん中々個性的なモノを選んできたな。思っただけなんですよ。因みにこれらの使い道分かりますか？」

「……いや、全く」「」

皆が一声に答える。それに彼女はまたツボに入ったのかくすくす笑い出した。

「ふふ。では、ご説明しますね。せつかくなので使ってみてください。まず、あー。その前に皆さんのお名前を教えてください。これから一緒に暮らすのですからお名前を知っていなくては……」

「ああ。そうですね。私は『黒騎士』の副団長をしています。クラウド・バルヒロツタです」

「同じく副団長のルドルフ・サルタ・セルバーンだ。よろしくなお嬢ちゃん」

「補佐をしています、ランドール・ドラ・バルタスです」

「俺はフラウ。下っ端共のまとめ役だ。まあ、小隊長みたいなもんだ」

「同じくカーネル・バンク。よろしく」

「ほんで、俺がマリツク。よろしくな！」

「ええ。よろしくお願いします」

自己紹介が終わったところで、それぞれの席に着いた彼等は、持ってきたモノをテーブルに置いたり、手に持っていたりしていたが、やがて彼女は一つ一つ用途を説明していった。

「まず、マリツクさんが選んだモノですが」

「マリツクでいいよ。さんづけは正直慣れてないから気持ち悪いんだよね」

「分かりました。マリツクが選んだモノ。これは『風鈴』ですね」

「……フウリン？」「……」

聞きなれないモノだったのだろう。皆から疑問だた。

「『風鈴』というのは、暑い時期などに窓辺に吊るして風で音が鳴るようになっているものですね。ちりんちりと綺麗な音が鳴るんですよ」

白いカップのような形を逆様にしたような形状に、中には青色の石が吊るされている。見ただけで涼やかでどこか品がある印象を与えた。

「へー。今度やってみよ」

マリックがどこか嬉しそうに手元の『フウリン』を眺めた。それを横目に見ていたフラウは自分が探してきたモノを、サラの目の前に晒すと説明を求めた。

「俺のは何に使うんだ？」

それを見た彼女は躊躇うことなく応えていく。

「フラウさんののは『虎の貯金箱』ですね」

「……チヨキンバコってのはなんだ？」

「……………」

私たちには最もな疑問だったのだが、彼女の常識では無かったらしい。暫しの沈黙のあと、平静を取り戻し、何事も無かったように疑問に答えた。

「『貯金箱』というのはお金を貯金つまり、お金を貯めて収納しておける入れ物の事です」

「へー。なんか、こいつの面構えがいいから思わず持ってきたんだが、そんなのに使えるのか」

「ちなみに、その虎の後ろの頭に細長い切り穴があると思うのですが、そこからお金を入れて、日常的に使わないように収納しておくんです。もしその入れ物全部にお金が貯まったら、その入れ物ごと壊しちゃってください」

「……………」

続いて言われた残忍な言葉に、思わず沈黙が周りから出る。



「……なにか、もつたいない使い道ですね」

「しかし、これでも中々便利なんですよ？入れたら最後、割らないと取り出すことはできませんから。きちんとお金が貯まって行きま

す。因みに、これに銀貨を一杯に詰め込むと金貨3枚分。金貨を詰め込むと晶貨2枚分くらいにはなるんじゃないですか？」

「なに！？本当か？」

「まあ、地道に貯めていければの話ですよ？あまり一日に詰め込みすぎるとお金が取り出せなくて、生活できなくなりますからね。気をつけて使ってください。『お金のご利用は計画的に』です」

この『チヨキンバコ』なるモノの効果にフラウから驚きの声があるが、そんな調子づいたフラウにクギを刺すことを忘れない。会話だけで彼女は当初において我々の本質をよく見抜いて来ていると感じられた。そう思ったところで、今度はランドールがそつと机に出してきて説明を求める。

「では、私のこれはなんでしょうか。中に砂が入っていて綺麗だったのでこれにしたんですが」

コトツと出されたそれは周りを陶器で囲まれ中のガラスが2つ内に行く毎に細くなっており、下のガラスの中には水色に輝く細かい粒が入っていた。

「ランドールさんの『砂時計』です」

「『砂時計』……砂が時間になるのですか？」

「その通りです。しかし、それは大きさからして10分間の使用のみです」

「10分間しか使えないのですか」

結構な大きさに見えるモノだが、以外に時間の幅は狭いようであ

る。だが、これにも彼女は意外な視点からこの『砂時計』の使用法を説明してきたのだった。

「ええ。しかし、ものは使いようです。時間を有利に使いたい方にはお勧めですよ」

「例えばどんな時に使います?」

「そうですね。例えば寝る前に10分間だけ読書をするとか、次の仕事をする前に10分間休憩にしよう。とかですね。たまたま、料理で10分間煮込まないといけない時とかにも使えます。ちなみに、その使用法は下に溜まっている砂の方を上にもひっくり返すだけです。落ちて行く砂が時間の経過になるので全ての砂が落ちた時が約10分間ということになります」

「はあー。なるほど」

しかし10分されど10分なのだ。彼女はそうランドールに説明し彼を納得させた。これはある意味凄いことである。少し堅物な彼だけに、そう簡単に頷かせるなど。彼の事をよく知っている彼らも表情には出していないが、きつと私のように驚いていることだろう。

驚きで鈍くなった空気を戻そうとしたのか、どこか甘く爽やかな印象を与え、良家のお嬢様方から多くの支持を仰いでいるカーネルが机の真ん中へと持ってきたモノを出してきた。

「では、私のこれは何なのでしょう。なにやら、この置物の顔に愛着が沸きまして」

「「「「……………」」」」」

確かに先ほどの空気は一掃できはしたが、カーネルは差し出したモノを見て今度は違う意味での沈黙は場を支配した。しかし、そん

な空気はお構いなしと、サラは面白いモノを見るように目元を緩ませ、説明を始めた。

「あら。カーネルさんはマトリョウシカを持って来たんですか」

「マトリョウシカ？」

「はい。マトリョウシカも、こう見えてただの置物ではありません」

「……へー」

「俺にはただの、丸っこい人形にしか見えないがな」

ルドルフのセリフに思わず途中で「確かに」と同意をしめた。

しかし、意に反して彼女は楽しそうにこの人形の特性をあげ、説明を続けた。

「ふふ。そこがマトリョウシカの良いところでもあります」

「これは一体何に使うんですか？」

「はい。これは実際やってみた方がいいかもしれませんね。ちょっと貸してください」

「あ、はい。どうぞ」

カーネルがそのマトリョウシカというものを彼女に渡すと、彼女はおもむろにその人形の上半身と下半身とで持ち構えると、一気に捻り上げた。

「……えっ」「」

一同啞然。しかし、どうしたことだろうか。その人形の上半身と下半身は分かれたはずなのに、その中からまた同じ顔の人形が出てきた。

「……ええー!!」「」

そして、彼女は最初の人形の身体をくっつけると、今度は中に入っていた人形の上半身と下半身を取った。そして、また出てくる同じ顔。それが7・8回ほど続いたころ最初の頃とは比べ物にならないくらい小さくなった人形があった。そして、全部で9体もの人形。しかも、皆同じ顔。

「……」

皆の間の抜けた顔を見てまたも笑いだす彼女は、ちょっと目に涙を浮かべながらもこの人形の説明をしてくれた。

「この人形はこうやって分けると中が空洞になります。それを利用して、大きさに合わせたマトリョウシカの中に色々なモノを入れておけるんですよ。例えば秘密の暗号文やらへソクリやら、お菓子やら。まあ、簡単に言うと他の人にバレテ欲しくないものを人形に入れて隠しておけば仕組みを知らない人にはただの人形にしか見えな。いと、まあ、こつこつのことです」

「なるほど」

確かに、そういう仕組みになっていると知らなければ、いくらでも仕様はある。と皆して納得させられた。

サラ様の趣味の一つ。？（後書き）

続きます。

サラ様の趣味の一つ。？（前書き）

文章長かったので2つにわけました！今更ですが、すみません（、；）

サラ様の趣味の一つ。？

あの変哲な人形の用途が分かったところで。私の隣でウキウキと一人期待をしているルドルフが、今度は俺の番だというように自分の目の前にあるモノを彼女の近くまで寄せ、説明を促した。

「今度は俺なあー。嬢ちゃん。これは何に使うんだ？」

「ルドルフさんが持ってきたモノは『酒器』の一種ですね」

ルドルフの厚かましい態度にも目もくれずにさらっと応えた彼女の答えにまたも疑問が浮かぶ。今机の中央には、入口の細い花瓶にでもなりそうなモノと幼い女の子がおままごとにも使いそうなほどに小さいお椀形のモノが置かれていた。

「シユキ？」

「はい。『酒器』とはお酒を飲む時に使う道具のことです」

「へー。じゃあ、このでかいのに酒を入れて、このちっこいのはどうするんだ？」

「そのちっこいのにそっちに注いだお酒を入れて飲むんですよ」

「このちっこいので飲むのか？なんか、物足りなさを感じるなあ」

確かに、あの大きさでお酒を飲むには小さすぎるように感じる。だが、これにもそれなりの理由があつての事と彼女の説明は続けられた。

「まあ、そうかもしれません、特にその道具を使う時のお酒は度数の高いお酒に限られます」

「そうなのか？」

「はい。度数の高いお酒は一気におおれませんか、その小さい杯

に注いで少しづつ飲むのが主流です。ちなみに、ストレートとお湯割りにしか使用できません。使用法は大きいそれにお酒を入れて、鍋の沸騰したお湯に器ごと浸します。もちろん中にお湯が入らないように注意してください。好みの温度より少し高い位になったらお湯の中から出して、あとはその小さい杯に入れて飲むだけです。これは、月を見ながら『月見酒』をするのにもってこいの代物ですね」

「……………嬢ちゃん。…お嬢ちゃんの年齢にしちゃあ、お酒に詳しくぎやしないか？」

さらさらと続けられる説明に、まだ15歳である彼女にしては詳しくすぎる、とルドルフならではの疑問を彼女にぶつける。ルドルフは見た目の通り、それなりに女遊びが激しい。そんな場での色事は勿論だがその席で並べられる酒だとして様々だ。そして酒好きのルドルフにその疑問は最もなのだろう。

「……………そうでしょうか？一般常識だと思っておりました」

「……………」

そして、痛い指摘を受けた彼女は一瞬の沈黙のあと、平然と嘘と分かる嘘を吐いてきたのだ。それも、笑顔で。それに私たちは無言で返し、遠まわしに「(そんな一般常識あるわけないだろう!)」

といった見えないメッセージを送る。

「さて、次に行きましょうか」

( )( )(サラッと流した! )( )( )

しかし、そんな空気を見捨てさつさと次へと移ろうとした彼女は、何故か私の方へと視線を送り、思ってもみなかった事を私へと告げたのだった。



「次はシエナルドさん。つと言いたいところなのですが、…実はクラウドさんのさっきの壺にも少し仕掛けがあります」

「えっ！そうなのですか？」

先ほどまでの彼女への疑問を忘れ、飾るだけの壺ではなかったのか、と。ただただ驚きを露わにした私は、どのような仕掛けがあるのか気になった。それに、気付いている彼女はどのような仕掛けなのかを説明をしてくれた。

「実は、それには『透かし彫り』の技法を用いてありまして。一見ただの壺なんですけど、実は3重構造になっています。外と内に挟まれるようにして『青龍』という東の方角を守る水の守護獣が描かれています。ですので、室内のこのような光では普通の壺と同じなのですが。ある事をするとう壺の表面にその龍神様が出てこられます」

「……ある事とは？」

「ふふ。さて、ここで問題です。壺は基本どのように使用しますか？」

説明された内容に驚きを隠せず、落ち着いているように見えて内心「続きを早く！」と促す私に、気付いているのかいないのか、彼女は逆に私たちへと質問を投げて寄こした。それに皆が考える中で、マリックが皆より一足早くその質問に答えた。

「はい！」

「はい。マリック」

「壺には食べ物や飲みモノなどの食糧を入れます」

「はい。正解。では、この壺の龍神様を見るにはどうしたらいいでしょう？」

「……………」

ここにきて、最大の疑問である。…マリツクの正しい答えに、更に質問を続けた彼女はとも楽しそうであった。しかし、出された質問に永遠と悩む私たちはその質問の答えが分からずにいた。それに業を煮やしたのか、今迄見守る体制を崩さなかったシエナルドが見かねたようにため息を吐き、先ほどの質問に答えた。

…勿論そんな事は長年の付き合いだから分かることで、普通の人から見れば淡々と何考えているのか分からない表情にしか見えないことだろう。そんなシエナルドが彼女の方に視線を向けると、何の感情も抱かない声で答えをあげた。

「……………」

「正解。……………」

予想外の人から答えが上がったのか少し目を見開いたが、すぐに元に戻すと理由を聞いた。シエナルドはそれにも淡々と答える。

「…貴方が言う龍神様とやらは水が守護だ。なら壺の用途に従って水を入れればいい。そして、貴方はこうも言った。『室内のこのような光では普通の壺』だと。ならばその壺に水を満たし、外の太陽の光にでも当てれば、貴方の言う龍神様は出てくるのではないか？」

シエナルドの説明に、目をどんどん見開いて行き、最後には口まですぽかんと開けたアルメリア嬢がいた。そして、説明が終わると同時に喜ばしいとも苦々しいともとれる顔をしていたが、最後には完敗したと笑いながら応えた。

「……………お見事です。……………まさか全てを言い当てられるなんて。出てきても壺に水を入れるくらいだと。まさか私の言葉尻をとって答えを見つけられるとは。‐クスクスクス。」

「……………貴方もよくこのようなモノを作られたな。どれも一級品と言つてもいいものばかりだろう。それを、こつも簡単に他人に渡すのか？」

シエナルドのその言葉に、先ほどまで笑っていたはずの彼女は表情を一変させた。無表情に近いそれにゾクリツと少しの恐怖を感じたが、それは一瞬の出来事だったようで、いつの間にか彼女の表情も元に戻っており、言葉柔らかくシエナルドの問いに答えていた。その姿は先ほどまでの彼女が幻だったのかと思わせる程に……………。

そして、どうやらあの表情を見たのは私だけであつたようで、さり気無く周りを見渡す私は皆がたいして反応していない事でそれを感じ取つた。その間にも彼女の話は進む。

「……………先ほども言いましたが、これらは私が趣味の一つとして作つたもの。私一人では全てを使うことはできません。ならば、きちんとその用途にしたがつて、飾りではなくちゃんとした用法で使つてくれる方にお渡ししたいと思う事は自然ではございませんか？使つて欲しくて私はこれらを作つたのです。使わないなど、正に『宝の持ち腐れ』ではありませんか。」

「……………まあ、確かにそうかもしれないな。貴方が作るモノはすべて、使うには惜しまれる作品ばかりだと、そう想つただけに過ぎん。不快に思つたのなら謝ろう。……………すまなかつた。」

「いいえ。私は特に不快など思つてはいませんので、その謝罪は受けとれません。むしろ、褒めてくださつたではありませんか。貴方の言葉で私は何一つとして不快に思つたものではありませんよ。」

初めて聞くであろうシエナルドの謝罪の言葉と共に彼女の対応は完璧という他なかった。相手の謝罪にたいして、尊厳やプライドといったモノを壊すことなく、謝罪の有無を行う。中々15の少女に出来る芸当ではない。幾つか不審な点と疑問に思う処もあるが、今は素直に良かったと思える。長年の付き合いで中々人に心開かないシエナルドではあるが、こうも彼女の言葉に素直な彼をみて不快な気持にはならない。むしろ好ましくさえ思う。

そんな姿に、今後のシエナルドと彼女との会話が大変楽しみだ大きな期待をのせ、会話を続ける2人を当時私は暖かく見守っていた。先ほどのアルメリア嬢の表情のことも忘れ、私は友人の思わぬ進歩に喜びを隠せずにいたのだ。しかし、私はそう遠くない未来に知ることになる。この日浮かべていた彼女の表情と、これから起きる数々の出来事での彼女たちの奇行のわけを……………。

クラウドside(終)

サラ様の趣味の一つ。？（後書き）

クラウド終了!!

サラ様の趣味の一つ。？

ルドルフ side

「そっぴや。シエナルドが持っているこれはなんなんだ」

「ああ。説明が途中でしたね。……………よくこれを選びましたね。

一見タダの長細い棒にか見えないうように」

「……………これがあつた部屋で、一番興味をそそられたのでな。色々ある中でこれだけが陳腐に置かれていた。見るからに細い棒のようには見えないうが、こちらに何か引っかけられる金具のようなモノが付いている。恐らくこれも何らかの道具かと思つたのだが」

「ええ。これがこの中で一番実用的なモノでしょうね。……………これは、書類や手紙などに文字を書く為の道具『ボールペン』ですね。

構造がめんどくさいので滅多につくりません。この中では一番稀少価値が高いものです」

「……………どの様に使う」

「そつですね。ちよつと待つてください」

そつ言つや嬢ちゃんは棚の引き出しの中から何か紙を取り出した。だが、机の上に出された紙は俺達が普段見ている紙とは違つようである。色とりどりの紙が並べられた。しかも、なにやら複雑な柄も付いている。その出来栄えに感嘆しながらも、黙つて嬢ちゃんの行動を静かに見ていたが、ランドールからの質問が飛んだ。

「この紙はなんですか？色々な色がありますが……………しかも、柄が綺麗でもありますね。」

「ありがとうございます。普通の紙が近くに無かつたものですから、これを代用しようかと。……………これは『和紙』という紙の一種です。草や花の繊維を取つて作つたものなんですよ」

「へー。……………あの、もしや、これも」

「私が造りましたが？」

「……………」

「……………器用だな。嬢ちゃん」

紙まで作れるのか。周りの皆は何度めかの放心状態だ。しかし、嬢ちゃんは構うことなく説明の続きをする。

「それで、この『ボールペン』なんです、普段皆さんが使っているのは羽ペンですよ」

「まあ、そうだな」

「羽ペンは一回一回インクの瓶に浸さなくてはいけません、これはその必要がありません」

「インク瓶なくしてどうやって書く」

「この中にすでにインクを詰め込んだ筒が仕込んであります。勿論空気に触れて凝固しないように工夫をします、すぐに使えなくなるということはないでしょう。書けなくなった時は中のインクが凝固したか、インク切れのどちらかでしょうから。インクが無くなれば中のインクの取り換えが必要になります。……とりあえず書いてみましょう」

そう言っただけで嬢ちゃんはその細い棒の金具がついた方を引っ張った。キュポッ

そんな音と共に出てきたのは先端がさらに細くなったモノだった。そして、そのまま嬢ちゃんは紙の上にスラスラと文字を書いて行く。

「これは、凄い。ホントにインク瓶いらんんですね」

何を書いたのかさっぱり分からない字だが。確かにインク瓶はいらないようだ。インク瓶いらんなんてどうい構造になってるん

だ。嬢ちゃんは少し書いたあと、先ほどの金具がついた蓋をしてシエナルドに向かって差し出ししながら

「ああ。ちなみにこの金具の部分ですが、これはポケットや紙にこのように刺しておく事が出来ます」

シエナルドの手を通り過ぎ、胸ポケットに金具を引っかけて中に『ボールペン』とやらを入れる。皆その行動に少し唖然としながら、嬢ちゃんは気にした風でもなく説明を続ける。

「持ち運びにも便利で、何時でも何処でもその場で、書類にサインや手紙やメモを残しておくことができますよ。注意事項としては、使ったらずくにその蓋で閉めていただくことですね。蓋もせず長時間使用しなかった場合、中のインクの凝固の原因になりますので。あとは、書いている時の癖でインク瓶に間違っても浸したりしないでください。壊れやすくなりますから。まあ、こんなもんでしょうか。あとはどうぞ、好きに書いてみてください。」

そう言いながら嬢ちゃんはテーブルの上の紙をシエナルドに向かって渡す。差し出された紙を素直に受け取り、何やら色々書いて行く。しばらく書き続け紙一杯に書き終わった時、ようやく書く手を止めた。

「凄いな。本当にインク瓶がいららない上に羽ペンよりずっと書きやすい」

目を見開いてそう評価すると、皆の視線はシエナルドの持つペンに注がれる。その視線には「使ってみたい。」といった好奇心がありありと浮かんでいた。それに苦笑を浮かべると、他の者に紙とペンを差し出し。書かせてやる。その誰もがこのペンに対して感嘆の



声をあげた。

「ホントに凄いですね」

これにはクラウドも小さい声で驚きを表現する。それを俺だけが聞きとがめ、俺は一人心中で思う。

あのシエナルドに「凄い」と素直に言わせるほどの技量をもつこの嬢ちゃんの方が凄いと。今日は一体全体どういう事なんだろうか。レオナード隊長が言ったようにこの嬢ちゃんはタダ者じゃない。最初に会った時からの言動、仕草や動作はどう考えても15歳の嬢ちゃんができるものじゃない。

貴族は14で社交界デビューを果たす。それは大人になったという証でもある。だが、14・5などまだ子供の範囲だ。16になって少し大人びてきたか。というくらいなのに、なんだこの嬢ちゃん。言葉、仕草、言動。どれをとっても完璧な大人の対応だ。数多くの女を相手にしてきたが、これには俺も驚いた。この嬢ちゃんは15にして、大人のなんたるかをキチンと理解してやがる。しかもそれにおける対処も把握してるようだしな。ホントこのお嬢ちゃん……。

「クツクツク」

面白くてつい小さい笑いが出てしまった。それを隣に居るクラウドに見られたが、コイツもたぶん俺の言わんとしている事や思惑も理解している。その証拠にクラウドの瞳も面白いといった風に、嬢ちゃんとシエナルドに視線が向けられている。今後がとっても楽しみだw俺はこの先お嬢ちゃんと関わっていく上で退屈するなんて事

は無くなるんだろう。そんな予感が胸をよぎった。

(終)

皆がペンに夢中になり、それが落ち着いてきた頃、レオナードが声をあげた。

「さてと、俺が最後になったか……。俺が持ってきたのはコレだ  
「！」

そう、自信満々にドンッ。と出されたそれは。

「……………『狸の置物』」  
「で、これはどう使った？」  
「……………」  
「サラ？」

レオンが黙ったままのサラに訝し気に声を掛けると、突然うつむき身体を震わせはじめた。それを見たレオンは焦り戸惑ったようにもう一度声を掛ける。

「サ、サラ。どうした。どこか気分でも悪いのか？」  
「……………クッ。よりによって……………これを、持ってくるなんて……………」  
「……………」  
「お、おい。サラ？」

「ふふ。ぶつ。……………クツ。はははつ。……………クツクツク」

口を押さえて笑うのを必死に我慢しているサラは、なんとか笑いを引っ込ませようと奮闘していると。皆が自分に注目して何かなんだか分からないという表情を浮かべているのを見て、更に笑いたくなるのを必死に押しとどめ、最後の説明をする。

「これは、……………クツクツ。……………何の変哲もない『狸の置物』です」  
「は？」

レオナードは意味が分からないと言った表情を浮かべてサラを見る。サラもレオナードの目をしっかり見た上でもう一度先ほどのセリフを更に分かりやすく砕いて説明した。

「ですから。……………この置物は狸という動物の形をした、ごく普通の『置物』なんです。……………まあ、ちよつとしたカラクリがあるとすれば、このように……………」

サラは狸の首に付いている小さな留め金を外すと、狸の頭をちょん。つと突つついた。すると、狸の頭は上、下と、上下に動き始め、それをひたすら繰り返し返している。

「つと、このように首が動く置物です」

そう説明したあと、何処からともなく沈黙が流れ、「ぶつ」つと  
いう笑いが聞こえると、それを合図にレオナード以外の者がレオナードと置物からさり気無く視線を逸らし、肩を震わせながら必死に笑いを堪え始めた。それから、少ししてやっと現状が呑み込めたのか、途端に顔を紅く染めながら、レオナードは笑いを堪えて震えて

いる者に鋭い視線を送る。それに、少しビクツつとす隊員たちだが、少しづつ落ち着きを取り戻し、その中でサラはレオナードをさり気無くフォローする。

「しかし、この大きさの置物ならば、大量になる書類の重しなんかにも使えると思いますよ。なにも、見て置いておくだけが、置物ではありません。種類によっては色々と使えるかもしれないね。もちろん、部屋に飾って置くだけでもかまいませんよ。……でも、よくあの大量にあったモノからこれを選んできましたね。この手のモノはもうほとんど造らないので、どこに埋もれていたのかと思えば……ふふ」

そういうサラの目は懐かしそうに目を細め微笑む。他のモノたちもそんなサラの類笑みに釣られながら、もうすっかり冷めてしまったお茶に手を伸ばすのだった。

サラ様の趣味の一つ。？（後書き）

『サラ様の趣味の一つ』やっと書き終わりましたよー。

さて、次はどっしりよっw

**チラつく不穏な影。(前書き)**

お知らせします。

これから少し慌しくなりますので、更新が大幅に遅れます。出来たら週に1・2回の更新はしたいと思っておりますので気長にお待ちください。

チラつく不穏な影。

それからしばらくすると、応接室の扉がノックされ、執事のセバスとロゼが入って来る。

コンコン

カチャッ

「皆さまお待たせしました。お食事の用意が整いましたのでご案内いたします。」

「こちらへどうぞ。」

流れるような動作で静かに昼食の準備が整ったことをセバスが伝えると、後ろに控えていたロゼが部屋へと案内する。

皆が応接室を出て行く姿を見やりながら、傍らに佇むセバスが此方らへとさり気無い視線を寄こすのに気が付き、目でそれに応じる。そして、サラが部屋へと残っているのに目ざとく気付いたルドルフはサラへと声を掛けた。

「嬢ちゃんは行かないのか？」

ルドルフのその言葉で近くにいたシエナルドまで立ち止まり、サラへと視線を寄こす。それに、静かに微笑むと。

「少しばかり用事ができましたので、先に皆さんで召しあがってください。」

「用事？」

「はい。私用で少し……………」

そう言ったサラに深く聞く事も出来ず、頷いた。

「そうか。用事じゃ仕方ないな。」

「ええ。…………そう言えば、皆さん昼食後はどうなさるご予定ですか？」

「…………午後には任務がまだある。一度城に戻って、帰るのは夜になるが、何かあるのか？」

「いえ、少し気になっただけです、お気になさらず。」

「そうか。」

「…………そろそろ行きませんと。食事が冷めてしまいますよ。他の方も待っているでしょうし。」

そう言うつや否や、廊下から「隊長」。ルドルフ副団長。「という声が聞こえてきた。

「ふふ。さあ、皆さんお待ちの方です。早めに行ってあげてください。きつとお腹を空かせてますわ。」

「……………そうだな。行こうか、シエナルド。」

「……………ああ。」

2人が部屋を出て行き、静かに扉が閉まる。ドア越しに気配が遠のいて行くのを感じながら、中にはサラとセバスの2人が残った。



しばしの沈黙のあと、サラは静かにセバスへと問いかける。

「どうした。セバス。あのようなタイミングでお前から行動を起こすのは珍しい。何か問題でも起きたか？」

先ほどのお嬢様然とした雰囲気はなりを潜め、今は異様な雰囲気醸し出すサラに、セバスは慣れたように今しがた起こった出来事を報告する。

「はい。どうやらサラ様が張った結界が無くなったのに気付いたネズミが3匹ほど、敷地内に入り込んだ模様です。現在は西の森にてアンナが応戦中、……すぐにでも片が着くかと。」

「……そう。最近また多くなったわね。……結界のことは仕方ない。一度此処の結界を解かなければ、レオン殿は兎も角、他の騎士たちは此処へ入れなかった。……はあ。だから最初に此の事を聞いた時、あまり気乗りしなかったんだ。」

重たいため息を吐き、ソファアへと身体を預けながら疲れたように顔に手を置く。

「報告は以上か？」

「……いえ、もう一つ。」

「なんだ。」

「近頃バークリッド侯爵が、何やらサラ様の周辺を嗅ぎまわっているとの情報が。」

普段聞きなれない名前にサラは顔から手をどけ訝し気にセバスの顔を仰ぎ見た。

「……バークリッド？現在大臣補佐職を担っている。あのバークリッド侯爵か？」

「はい。近頃下町のトニャーチャという店に頻繁に出入りしているようで、そこから何度かこの屋敷へと偵察部隊が送り込まれています。」

「……何故また大臣補佐がそのような事を。」

「……詳しい事は分かりませんが、恐らくサラ様の力を狙ったの事でしょう。」

「はあー。難儀な事だな。」

これから先のことを思うと更に頭が痛くなる問題が山積みで、またもサラから暗ーいたため息が出てしまうのは仕方のないことなのだろう。

いつそ何らかの方法で一掃出来ればいいのだが、それを実行しようにも色々と政治的な面が邪魔して簡単にはいかない。まだ何かしらの協力があれば、行動しやすいのかもしれないが。何せ相手はほとんども地位のある貴族や外国からの密偵または暗殺者ばかりだ。まあ、外国のお客様はそこまで対処に困らないのだが、問題はこの国の貴族たちだ。

サラの時々尋常を逸した力は見る者によつては、恨みや妬み、欲望、果てには恐怖の対象や何らかの実験台となる。その為日夜命を狙われ、攫われそうになる事など、日常茶飯事のような生活を送ってきたのだ。お陰で、憑依した当初はそれはそれは大変だった。

昼夜問わず、屋敷に侵入してきては寝首をかかれそうになるは、使用人に化けて食事に毒を盛られるは、事故に見せかけて馬車に轢かれそうになるは。もう数えたらキリがない程で。命が幾つあつても足りない思いを、この5年もの間してきた。お陰で、実践経験に關してはちよつと自信がある。それに現世での趣味で極めていた武術が大いに役に立つてくれているので、今迄の敵を相手にするのに特に困らなかつた。

（ここ最近じゃ、夜の運動がてら相手にしてるからどんだけ食べても太らないし、運動不足で身体が鈍ることもない。いやー、こう考えると敵さんもそう悪いモノに見えてこないから不思議だ。）

チラつく不穏な影。(後書き)

サラ様裏表激し〜)、 、 ;)しかし、今後どうやってあの2人をくつつけて行こうか。……悩みは尽きません。

## その頃の昼食（シエナルドside）

シエナルドside

ルドルフと共に応接室を後にし、先に部屋へと出たクラウド達と廊下の途中で合流をすると、待っていたレオナードが私達の後ろを覗き込み。誰も居ないと分かると、こちらへ視線を向けて問いかけてきた。

「サラはどうした？」

「ああ。嬢ちゃんなら何か用事が出来たとかで、「先にご飯食べてくれ」だそうですよ。」

「用事？」

「ああ。そうらしい。」

「…そうか。」

レオナードは少し考えるような仕草をして、チラリと執事を見やしたが、執事は見向きもせず平然と佇んでいる。

「まあ、いいか。それより今日の昼飯はなんだろうな。ここの飯は上手いから期待していいぞー。」

そう楽しそうに踵を返し、執事が案内するすぐそばの部屋へと入っていった。それに続くように皆が入り、準備の整ったテーブルへと着く。そこへ並べられる料理の数々。至ってどこにでもある昼食と変わらない。

「おいおい。今回はあの料理は出ないのか？」

不満げに並べられる料理を見るレオナードは給仕をしていた執事と小さいメイドに問う。それに、2人は静かに応えた。

「……申し訳ありませんが、レオナード様が仰る『あの料理』は作ることが出来ません。あれはサラ様が気まぐれでいつの間にか作っておいでになるので、我々は作り方を存じ上げないのです」

「じゃあ、俺が来た時の昼食や夕食、今まで出てきていた料理はサラが全部作ってたって言うのか？」

「そうでございます。ちなみに……誤解がないように申し上げておきますが、此処での食事は普段他のところとそう変わりません。サラ様が気まぐれに作られた時に限って、図ったかのように来られるレオナード様の運が今迄よかったです」

若い執事が事務的に答えるのに対して、小さなメイドは言葉こそ丁寧だが、言葉の中に含まれる嫌味を愛らしい顔でニツコリと笑う姿は、本当に先ほどの言葉を吐いた者と同一人物なのかと疑いたくなるものだった。周囲は微妙な空気に包まれ、言われた本人も少し呆気に取られながらも、その顔は少し引き攣っていた。

「……『あの料理』って？」

そんな空気もなんのその。無邪気に食事をしながらマリックが問いかけた。この微妙な空気を打開せんとレオナードはすばやくその話題に飛びつく。

「『あの料理』つつうのはな。時々この家で食べる『摩訶不思議な料理』の事だ」

「摩訶不思議？」

「ああ。その料理はこの国。いや、どの国に行っても味わったことのない程の美味で不思議な料理をしているんだ」

さらにどんなモノかを説明していたレオナードは力説するように語り出した。それだけで、どれだけその料理が美味しいのかが理解出来る。話を聞いていた何人かがのどを鳴らす。想像するだけでも美味しそうな料理とは一体どんなものなのか。しばらく厄介になるのだ、その内堪能出来る機会があるかもしれない。

それにしても、アルメリア嬢はどれだけ多才なのか。使用人たちにも随分好かれているし、ここに来た時のあの魔術は見事な腕前だった。ああも、複雑な術式を一瞬のうちに出現させ扱うことが出来る者は滅多に居ないだろう。城にもかなりの実力者が居るとはいつても、今回のような力の使い方をする者がいるかどうか。

一時期噂になったアルメリア嬢の話は嘘ではなかったのだと、実際目にして思い知らされた。一瞬の出来事ではあったが、相手がどれだけの実力者であるかは理解しているつもりだ。国を守り戦が起これば何時でも戦場に命を置く身。死と隣り合わせだからこそわかる相手の力量を見破るのはそう難しいことではない。

そんな風に己の思考に耽っていると、またも部下の声が聞こえてきた。

「なあ。俺さつきから気になってたんだが、レオナード隊長って随分アルメリア嬢と仲が良いな。話きいてると何度かこの家にも来るみたいじゃねえか。アルメリア嬢の名前も呼び捨てだしよ」

「そう言えばそうだな。アルメリア嬢の方もレオナード隊長には俺達より気さくな感じがするしな」

食事に手をつけながらそう話すフラウとカーネルの会話に「確かに」と内心同意を示す。と同時に何やらそれが嫌だと想う気持ちが浮かび上がる。今までの会話でも時折そうだった。レオナードがアルメリア嬢を呼ぶたびに何かいい感情を抱かないのだ。胸あたりがもやもやと何か黒くて重い空気を含んだような重しか何かが浮かんでは消え、浮かんでは消えを繰り返す。だが、逆に彼だけに許されるその関係を何故か羨ましいとも思う。

そこまで考えてハツつと我に返ったシエナルドは皆に気付かれないうちに、小さくため息を吐くと自分でも聞こえるか聞こえないかの声量で呟やいた。

「はあ。…一体どうしたというんだ。俺は」

今日という今日の自分は己でも理解しがたい感情ばかりで、正直どうすればよいのか分からない。浮かぶのは先ほどまでのアルメリア嬢の姿。ここには来ないと分かっても目の端で彼女の姿を探そうとしている自分がある。そんな自分が無償に滑稽に思え、苦笑が浮かぶ。しかし、逆に何か胸の内を満たされる想いでもあった。……本当にどうしたというのか。そして、そんな自分の感情をまるで人事のようにどこか冷静に見つめる自分も居た。

やがてこれ以上考えてもラチが明かなくとも思考を切り上げ、もう少しで皆食べ終わるだろう頃にカチャッと静かにドアが開く音が響いた。

(終)





その頃の昼食(シエナルドside)(後書き)

うん。自分の文才と知識の無さに呆れを通り越してもう泣けてきました(T-T)この先頑張っていけるかしら。

## サラの後悔先に立たず

昼食の席に顔を出したのは、この主であるサラ自身であった。それに、いち早く気付いたのは言わずもな、シエナルド本人。シエナルドはサラの思いがけない登場に少し驚きながらも素早く立ち上がり、空いている席へとエスコートしようとする。サラはそんなシエナルドに一瞬驚きを露わにしたが、すぐに元の笑顔に戻り、差し出された手に静かに手を置き、自分の席へと着いた。

見た目だけなら貴族社会に慣れた騎士たちには普段の光景である。ここに居る騎士たちは主に宮廷騎士に近い立場に居るのだから幾度となく女性たちをエスコートする場面は多い。

……しかし、サラの心情では慣れ親しんだとは言えなかった。表面はポーカークフェイスを保って微笑んではいるが、あまりに気障……いや、慣れない男性の優しさや気遣いに、思わず笑え……いや、戸惑いと羞恥心が浮かぶのだ。そして何より物語の中でしかありえないような事が自分に起こっていたら、もういつそ泣けてくるというものだ。

「（他人のを見るのが楽しいのに！！何故自分がこうなるっ！！）」

そう、サラは様々な場面で才能を發揮し、『秀才』だ『鬼才』だと言われているが……そんな彼女には貴族出身であるが故に幾度となく苦手なものに遭遇しなければならぬ立場へと自然と追いやられていたのだ。それが……自身の『恋愛事』、に『レディーファースト』、そして『美男子』の3つ。

サラはどうしてもこの3つにはいつまで経っても慣れないでいた。といっても「慣れたくもない」というのがサラの意見なのだ。しかし、それも前世での環境が影響していることもサラ自身にはよく解っていることだった。だから尚更慣れようとも思わないし、正直お近づきにもなりたくないものだった。

その為、サラは15にして既に社交界デビューを済ませたといつても、あまり表舞台には立たない。周りもサラが『稀なる力』のせいで好奇の眼で見られる社交界に寄りつかないのを知っているが故に、あまり急かす人も居ない。お陰で今まで、のんびりとそれなりに平和に暮らして来たのだ。(多少の厄介事はあれど。)

しかし、そんな暮らしも今回のレオナードが持ってきた件でそうもいかなくなってしまった。(特に後ろ2つが……。)

この件を引き受けた当初、サラはそれなりに付き合いのあるレオナードだからと深く考えもせず、頼みを引き受けてしまったが、今日彼等を見てから今更ながらに後悔の念が次から次へとサラを襲った。(せめて、誰が来るのかを引き受ける前に知っておくべきだった。)

そう、サラは気付いていたのだ。最初彼等を目にした時から。全身黒の軍服を着る『黒の騎士団』。その名を聞いて知らぬ者など居ないのではないかというくらいにこの国や他国に知れ渡っている。この国最強の軍事力を誇る部隊。それが、この神秘的な銀糸の髪を持つ男。シエナルド・ドルテ・オーデンシユバンク率いる『黒の騎士団』。過酷な修羅場を幾度となく潜り抜け、厳しい訓練で生き残った本物の実力者だけが入ることを許された最強部隊。それが、この『黒の騎士団』である。

それ故、この『黒の騎士団』に入りたいと憧れを抱く者は多い。

何せ筆頭はあの噂に名高い『氷結のシエナ』の異名を持つ男だ。カリスマ性もあれば実力、地位（彼は公爵家の三男）と申し分ない。女性ならば誰もが一度はお相手したいと思える相手だろう。

しかも、近年の『黒騎士団』は稀に見る実力者ばかりが揃っているのだ。その誰もが容姿、実力共に申し分ないのである。（これにより、『黒騎士』の評判が益々上がったのは言うまでもないことだろう。）

さらに、実力さえあれば貴族・平民問わずにそれなりの地位まで上り詰めることの出来る部隊でもある。勿論その実力や功績から貴族からの尊敬や信頼も大きい。が、何より民たちからの憧れがより大きいのも事実である。

そんな名だたる騎士団たちに不平はなく、普通の黒騎士の隊員たちがサラ宅に泊まるのであればまだ良いのである。だが、今回何故こつちも後悔する羽目になったのか。……それは、ここに居るメンツ全てが『黒騎士団』の中でも上位に君臨する実力者ばかりだったからだ。

普通であれば喜ぶべきことなのだろう。なにせ今この場に国の軍事トップたちが勢ぞろいしているのだ。（ある意味壮観とも言える。）だが、今のサラにとって、それはあまりありがたくない事だった。……なぜなら

「（こつちとら最近少なくなったとはいえ、毎度の如く命を狙われて、その処理に追われているんだ。あまり表沙汰にしたいくない此方としては、今軍に気付かれて、嗅ぎ回られるのは非常に困る！！）」

というのが理由である。『黒の騎士団』と言えど、まだ普通の隊員ならば一緒に暮らしていても、裏でどんなに此方が動こうともバシない自信はサラにはあった。ここに居る使用人たちは誰もが優秀

で、この国の騎士たちにも負けない程の実力を持ち合わせている。

「（…だが、いくら優秀だとは言っても、こつも油断出来ない程の力を持つ者が居るとなると。……どうしたものか。）」

サラは思わず頭を抱えたくなつた衝動を必死に堪え、『黒騎士』  
たちを前に淑女たる頬笑みを浮かべてみせるのであつた。

## サラの後悔先に立たず（後書き）

あー。なんか一向に進展がなく（というより話が先に進まない）  
そんな状況にどうしようかと悩む日々でございます。

拙い文章ではありますが、今後とも暖かく見守りください、  
、（ノ）

## サラの副業…それは

「サラ。お前用事があつたんじゃないのか？」

サラが座つたのに合わせて、レオナードの質問が飛んだ。それにサラが微笑みながら応える。

「ええ。つい先ほど終わらせてきました。私もお腹がすいてきたので昼食を取らせて頂くこうと思ひまして」

「そうか。…あ、そついや、サラ。あの上手い料理。あれサラが作つてたつて本当かよ」

「…あの料理？」

サラは話が見えず、首をかしげる。それにレオナードが先ほどまでしていた話の内容を簡単に説明する。それを聞いたサラは納得したという顔で先ほどのレオナードの質問に応えた。

「確かに時間が空いて、私が暇つぶしに料理した時に限つて、レオン殿はよく此方にいらしてましたね・クスクス」

「じゃあ、やつぱり今迄のあれはサラが作つてたのか」

「ええ。まあ、たいしたモノではないのですけれど。そんなに気に入つてくださるとは…」

「じゃあ、なんで今日の昼食は『あの料理』じゃないんだ？」

レオン殿はそこまであの料理が食べたかつたのだらうか。それに、何やらメイドのリリネットから痛い指摘を受けて少し拗ねてしまつているらしい。そんなレオナードをみて、またも笑いそうになるが、あえてそれは抑えて今は正直にレオナードの質問に答えることにした。



「勿論。それは私に時間がなかったからですな」

「だが、今日は一日家に居たんだろ？」

「…確かにそうですが、家に居ても私には仕事がありますので」

「家で仕事？…ああ。あれか、なんだ締切近かったのか？」

「…まあ、そんなところですよ。」

サラは運ばれてきた食事に手をつけながら、質問に答え。シエナルドたちは食後のお茶をゆっくり飲みながらレオナードたちの話を聞いていた。そこへ、少し眉間に皺を寄せたシエナルドがサラとレオナードの会話に唐突の質問を投げかけた。

「あれとは何だ？」

それに2人は驚いた顔をし、それを見たシエナルドの眉間の皺が更に増える。

「（なんだ？突然不機嫌になっちゃって。）」

そうまたも首をかしげるサラに対して、レオナードは突然会話に入り、不機嫌になったシエナルドを見て、「はは〜ん」と、何かに思い当たると人の悪い顔をし、そして次の瞬間には満面の笑顔でシエナルドの質問に答えた。

「前にも言ったろ。サラは副業で小説を書いているんだよ。最近じゃほぼ推理小説と恋愛小説しか書いてないみたいだな」

「…レオン殿。よく御存じですね、そんな事。私レオン殿に言いましたかしら。推理小説のことはともかく恋愛小説のことまで」

「おいおい。誤解すんなよ！俺の妹がサラの書いている恋愛小説の熱烈なファンだから知ってるだけだ！…そもそも俺が恋愛モノなんか

読むわけないだろうが」

「まあ、そうですね…」

レオナードの応えに思わず口を出してしまい、それに慌てて弁解するレオナードを見やりながら「それもそうだ」と納得する。そこへ、今まで静かにお茶を飲んでいたランドールが話を振ってきた。

「そう言えば、推理小説と聞いて思い出したのですが、最近特に人気の推理小説がありますよね。この間城下の本屋へ出かけた時に大々的に置いてあつて、何冊か買って読んでみたんですが…これがまた凄いのなんの！私はあの時初めて小説に感動というモノを覚えまして！！今度は非続きを買いに行かねばと思つていたんです。」

「…それはもしや、『名探偵コナドイル』の事では？」

「「ブツ！！」」

サラとレオナードは口に入れたモノを吹き出しそうになり、慌てて口元を押さえて飲み込んだ。しかし、その後2人して盛大にせき込んでしまい少し涙目になったが、先ほどの推理小説の話に盛り上がるランドールとクラウドにはそんな2人は見えていないらしい。

「！！…そうです」

「私もあれには感動しました。あのような名推理があるなど、作者の『シズカ』殿は素晴らしい作家だと感じました。是非一度お会いしてみたいものです」

その言葉に思わずサラは視線を騎士たちから外し、あらぬ方を向きながら引き攣った笑みで「ははっ」と乾いた声を出した。そんなサラを見ながらレオナードはニヤニヤと面白そうにしている。

「（にやる。人事だと思って。…いや、確かに人事ではあるけど。）」

内心毒づきながら一人ツツコミをしていても、クラウドたちの会話は今だ終わりを見せない。それどころか、カーネルの一言で更に話に広がりを持たせてしまった。

「あ、その『シズカ』殿とはもしや『怪盗ルパーヌ』も書いていませんか。私はあの小説が大好きなんですよ。1冊読み切りなのでとても読みやすいですね。」

「ああ！それなら俺も読んだことある。あまり本を読まない俺でもあれは面白くてつい慣れない徹夜をして読みふけっちゃまったぜ」「俺も！俺も！俺もそれ読んだよー。何気にルパーヌってカッコイイよね」

そんな盛り上がりを見せる間に、サラは食事を済ませ食後のお茶を楽しむ。もう目の前の出来事は完全無視。むしろお茶を楽しむことで現実逃避をしているのだ。

「（このお茶を飲んだら、即座にこの場を離れよう。うん、今日はその方がいい。絶対）」

そう考えているサラであったが、……現実にはサラにそう甘くはなかった。そして、本日最大級の爆弾が落とされたのだ。…例に洩れず、あの男の一言で。

「はあ。『シズカ』殿とは一体どういった方なのか。この感動を是非本人にお伝えし、続きを書いていただきたい！！…しかし、どうやって伝えればいいのか。書面にして伝えるには中々難しいです」「なら、本人に直接言いやいいじゃねえか。ちようど此処に居るん

だからよ  
「

ピキッ

その瞬間、この場に居る誰もが動きを止めた。そして、数秒後。クラウドたちが目にも止らぬ速さでレオナードへと詰め寄る。

「だ、誰です！…こ、この場にいらっしやるのですか！？」

「えっ、あー。」

「焦らさず、早く教えてください！！」

「隠し事はいけませんよ。レオナード隊長」

「おいっ、少し落ち着け！お前ら！！」

あまりの迫力にあのレオナードもたじたじになっていた。そんな場面を見たサラは少し青ざめながら、誰にも気づかれないように席を立とうとして、

グワッシ！！

レオナードの手によってサラの腕を掴まれ

「何処に行くのかな？サ・ラ・ちゃん（まさか、こんな状況の中一人逃げ出そうなんて思っただけよな？） - ニツコリ」

素敵な笑顔で問いかけるレオナードに、サラはただただ乾いた笑いを漏らし、次の瞬間には肩を落とすのだった。そして、サラの逃亡は遭えなく失敗と相成った。



## サラの副業…それは（後書き）

ああ。結局逃げ切れなかった。

そして、何かと厄介事を起こすのはもうレオナードの役目かもしれません。あははは（ノ、；）

## サラの条件

その後は結局、サラが『シズカ』であることがバレ、レオナードへと押しかけていた者たちは今度はサラを標的に質問の嵐を浴びせた。応えられる質問には答えるサラだが、突っ込まれて痛い質問なんかは「企業秘密」だといってなんとか誤魔化していた。

しばらく続いた詰問大会はやがて終わりをみせ、リリーが新たに入れたお茶を飲みながら一息ついた。他の者たちも落ち着いてきたのだらう。ゆつくりとお茶を飲みだす。

「しかし、アルメリア殿がああ『シズカ』殿だったとは……。世の中案外狭いものなんですね」

「そうだな。花瓶や紙は作るは、料理はするは、小説は描くはえらい多才だな……。って、イタッ！何すんだカーネル！」

「敬語を使え敬語を。フラウ、相手はお前より身分は上なんだから。気をつけなよ」

机の下で脚を踏まれ、カーネルに叱られて口を尖らせるフラウは「だつてよー…」と小さく呟く。それに反論は許さないといったカーネルの爽やかな笑顔が出され、フラウは口をつぐむ。若干マリツクとランドールの顔色も悪い。だがそこに、サラが声をかけた。

「私は構いませんよ。敬語じゃなくても」

「……えっ……！」

その言葉に驚いたのはクラウドたちだけではなかった。この場に居る執事のロゼやメイドのリリーまでもが驚きの声を思わずあげてしまったのだ。

「ついでにその堅苦しい私の呼び名も改善していただけると助かります。レオン殿のようにサラと呼んでいただいて構いません」

「なにかと呼びずらいでしょう」といって可愛らしく顔を傾かせる仕草は歳相応で、この時初めてこの場に居る者達はサラがまだ15歳であることを思い出したのだった。しかし、ここで口を出してきたのは執事のロゼだった。

「お待ちください。サラ様。伯爵家の令嬢たる者が、そうやすやすと名をお許しになるなど……」

「あら、此処にいる使用人は皆私を名で呼ぶことは許しているし、何より彼等は私的な場と公式の場での区別はつけます。曲りなりにも彼等はこの国の騎士なのですから。それぐらいの分別はできるでしょう。勿論私も、公式の場では改めます」

「しかし……」

「はあ。……ロゼ。最初の頃、貴方達を拾った時も私は名を許した筈よ。私は身分に囚われない。囚われるつもりもない。貴族だからといって気取るつもりもない。身分など取ってしまえば私とてただの小娘も当然なのだから。……っと、少し話過ぎてしまいましたね。まあ、そういう事ですので普段通りで構いませんよ。この先ずっと敬語など、仕事以外で使うのは疲れますでしょう」

サラの言葉に少し啞然としながらも執事のロゼも騎士たち、レオナードまでもが黙ってサラの言葉に頷くのだった。

「第一、私は此処に住む条件に『人として、最低限の礼儀があれば



身分の差は問わない』と伝えてあつた筈ですが？」

「確かにな……」

「…本当だったんですか。その条件」

「出来もしないことを私は約束したりしません」

平然と返す言葉に誰も何も言えなかつた。

「じゃあ、『立ち入りが禁止されている場所以外の部屋なら自由に使つてよい』つてのも？」

「ええ。立ち入りが禁止されている部屋は2階全てと1階のオフィス、使用人たちの部屋。外では西の森と東の森への立ち入りを禁止します。なお、そこには私の結界と罫が張つてありますので、無闇に入りませんように」

またも、沈黙が降りる。まあ、騎士達が沈黙するのも仕方がないというものだった。何せサラの屋敷は広い。先ほど指定された部屋を除いたとしても広かつた。それを知っていたのは、食卓に向かう途中で執事がこの屋敷について幾つか説明してくれていたからだ。

この屋敷は『凹』の字を書いたような形に建っており、周りをぐるつと森に囲まれている。北の森を抜けた先はちよつとした崖になつており、下には大きな河が流れている。東と西の森にはよく魔物が出てくるのでサラが結界を張つてその侵入を防いでいた。ちなみに結界は先先代の時から張られていて、それにサラが手を加えたようだ。（勿論魔物と侵入者用に改良したモノ）

屋敷には温室はもちろん、馬小屋やちよつとした訓練場、馬を走らせる場所まである。さらにはこの時代に珍しくも屋敷の東と西の棟を結ぶ渡り廊下も造られていた。そんな屋敷を自由に使つていい

というのだ。嬉しいを通り越して戸惑ってしまふ。

誤りがないように言っておくが、普通の貴族にこんな広い屋敷も珍しいが、問題はそこではない。一介の伯爵の家でこのように設備が整った家はそうないだろう。それも、ひとえにサラのご先祖様たちの功績があつてこそである。けして、どこの貴族もこんな馬鹿みたいな屋敷の造りはしていないのだ。

「残りの条件『城からの使い、緊急の用件以外の他者の立ち入りを禁ずる』とはどうしてです」

「えー。大変言いにくい話なのですが、私の屋敷にはどういうわけか金目の物を狙つて侵入してくる者が後を絶えないので、この屋敷周辺にも結界を張つてるんです。その為、出来るだけこの屋敷には人を寄せ付けたくないのです。結界は私が許可した者しか入ることが出来ないようになっていきます。許可なく近づけば、ぐるぐると周りの森を彷徨うことになるでしょう」

恐ろしい事をさらつと言いのけるサラの笑顔は大変素晴らしかったとここに記しておこう。

「では、『この屋敷に属する者たちへの必要以上の詮索を禁ずる』とは？」

「……ここに居る屋敷の者も含め、それぞれが様々な事情を持っております。きつと、これから共に過ごすに至って様々な疑問が出てくるかもしれません。……それに対して本人たちが話すならそれに越したことはありません。ですが、時々必要以上に知りたがる御仁が居います、あまりに嗅ぎ回るものですから・フフ」

「また、そうなる前に最初にクギを刺しておこうと……つまりそーい

「う事ですか」

「そついう事ですね」

クラウドとサラが穏やかとは程遠い笑みで頬笑み合う。それを見ていた者たちは少し震えながらも小声で囁きあつた。

「（…あのクラウドの笑みと微笑みあつていられるなんて）」

「（俺、クラウド副団長の邪気のある頬笑みって苦手…）」

「（…誰も得意な奴なんて居ないだろう）」

「（タダ者じゃないですよ。ほんとサラさんって）」

その後しばらくして、そろそろ1時半になろうとした頃。騎士たちは昼の業務があると言って城へと戻って行った。サラは玄関からその姿を見送りながら、遠く去っていく騎士達に向かって大きなため息を吐くのであつた。

「ほんと、楽じゃないわ。どうにか、クギは刺しておいたけれど。今後どうなるのか全くの予測不可能だわ。……あー。ほんと疲れる

」

「…自業自得ではありませんか。サラ様」

サラの背後に立つメイドのイザベラから痛い指摘をもらつた。

「うっ……………イザベラ」

「レオナード様の真剣な頼みだからといって、安易に受けすぎですわ」

「……………」

サラは気まずげに視線を彷徨わせる。それをジト目で見ながらイザベラは尚も続ける。

「もっと、よく考慮してから結論を御出しになってくださいまし」

「め、迷惑をかけます」

「ふうー。まあ、時々そういったお人好しなところも私たち使用人は皆好きなのですけれどね」

「……………」

サラにも、自分の安易な決断で他の者に迷惑を掛けていることは自覚しているだけに、イザベラの言葉は耳に痛かったし、今更ながらに申し訳なさが募る。そんなサラを見ながらイザベラは今度は優しい目で続ける。

「今回は仕方ありませんわ。受けてしまったのですから」

「ごめんなさい。イザベラ」

「…まあ、そう心配なさらずとも。私たちはサラ様もご存じのように優秀なアルメリア家の使用人ですもの。皆、サラ様の為ならこの命も惜しみませんわ」

「イザベラ!!」

「何を言うの」とサラは叫ぶが、イザベラは優しい目のまま続ける。

「このアルメリアに使える使用人は全てサラ様に救って頂いた者です。その恩はもはや計り知れません。サラ様は私たちの主。……どうあっても、失うわけにはいかないのです！それに、私たちはそう簡単にやられたりしませんわ。それはサラ様が一番よく分かっておりますでしょう?」

最後は茶目っ気たっぷりにおどけて言っイザベラに、サラは「そ  
うね」と穏やかに笑ってかえした。

## サラの条件（後書き）

いつか番外編で用人たちの過去を明らかにしたいw

## 自覚した恋 狙うは…

ところ変わって、城へと戻ったシエナルド達は各々が各自の仕事へと戻り、明日の準備にかかっていた。シエナルドは自室の執務室で今まで溜まっていただろう報告書へと目を通しながら、明日の警備をどの様に配置するかを検討していた。そこへ、訪問を知らせるノックが響く。

コンコン

「何だ…」

シエナルドは普段から自室の執務室の前に兵を配備していない。普通なら『黒騎士』の隊長である自分を狙ってやってくる輩に対して警戒をしなければならぬだろう。しかし、気配を読むのに長けた彼は自分の空間に他人の気配がある事を嫌っていた。己が認めただけにしか同席を許さない。それもシエナルドが『氷のシエナ』と呼ばれる所以の一つでもあった。

そして、今日この日にシエナルドの元を訪れたのは先ほどそこで別れたばかりのレオナードだった。

「よっ！シエナルド」

相も変わらず能天気な程に陽気なこの男は、シエナルドの中でも数少ない気を許せる内の一人だ。その事を本人達もよく分かっている。ここで、こうして気軽にお互いの隊舎を歩き来している。行き来するといつてもそのほとんどがレオナードの一方的な訪問となっているのだが。それでも、こうして普段と変わらない態度のシエナルドを見れば、どれほどレオナードに気を許しているのかが窺い知れる。

「今度は何の用だ」

特に用もなく来るこの男は、シエナルドが何をしようがお構いなしに訪れ、己が満足すれば帰っていく。そんな日常であったため、今回もそうだろうと思いついていたシエナルドは最早定番となったセリフを吐きだす。普段ならここで「暇だったから」という言葉が返るのだが、どうやら今回は違うのかレオナードから返ってくる言葉は無かった。

「……………」

シエナルドの言葉に無言を返したレオナードに、今まで資料に目を向けていた視線を本人へとむけると、そこには無言で己の顔を窺い見るレオナードの姿があった。

何時も五月蠅いというわけではないが、それなりに賑やかなレオナードが急に真面目な顔でシエナルドの様子を見る姿を訝し気に見返すシエナルド。両者の間にはしばらく無言の時間が続き、妙な空気が流れた。しかし、その空気を先に破ったのはレオナードだった。

「なあ、シエナルド。…お前サラのことが好きだろ」

「は？」

無言で己を見ていた男の唐突過ぎる言葉に思わず目を見開き、聞き返すシエナルド。そんなシエナルドの反応にニヤニヤと今度はにやけた顔で楽しそうに見る男に、自然と眉間に皺が寄り、視線を逸らすために再び手に持っていた資料に目を通し始めた。

「何を馬鹿な…」



「おいおい。今更隠すこたあねえーだろ」  
「隠してなどいない」

尚も資料から視線を放さないシエナルドにレオナードは呆れたため息を吐く。

「嘘吐け。お前明らかにサラが好きだろうが」  
「はっ。何を根拠に…」

今だ認めようとしなないシエナルドにレオナードは少しだけ意地になる。

「今日一日俺がサラに絡む度に眉間に皺寄せるは、名前を呼べば機嫌が悪くなるは、俺との会話に無理やり入って来るは……。理由は十分じゃねえか。これでサラを好きじゃないってどうして言える」  
「……………」

レオナードの言葉にしばし固まると、今度は考え込むように黙り込んむシエナルド。その様子をじっと見ていたレオナードは、「まさか…」と思いついた考えが思わず口をついて出る。

「…まさか、自覚無かったとか、言わないよな……………」

「あははは。そんなまさか」と笑うレオナードに対して何も言わず、今だ考え込んでいるシエナルドにマジで気付いてなかったのか…と一時放心したが、次の瞬間に「あいたた…マジか」と軽く痛む額に手をのせ俯いた。その反応に少しむっとするシエナルド。

「なんだ、その反応は」

「いや、だっってお前…………もうすぐ26だろ。恋の1つや2つした事

「　　くらい」  
「……………」

レオナードの言葉に何気ない顔で顔を背けるシエナルド。無言で肯定を示した。これにはレオナードも堪らず、少し感情的に叫ぶ。

「さて！ちよつとまって！…何だその無言は。まさか、26になつてまで初恋すらまだだったなんて言わないよな？26だぞ？流石に恋くらいしたことあんだろ！！」

「……………」

これまた無言で返つてきたシエナルドの答えに、「ありえん」とドツと疲れながら呟くレオナードは、シエナルドの座っている机に両手を着いて頂垂れた。そして、そのままの状態で少しくぐもつた声でシエナルドに問う。

「シエナルド、お前その容姿なんだ。モテないわけじゃないだろう。」  
「……………」

「…だからなんだ」

さり気無くモテる事を肯定され少しピキツときたが、今はそんな場合じゃないと自分を抑えたレオナードは落ち着きを取り戻しながら顔をあげて、再度シエナルドに問いかける。

「確か俺の記憶が正しければ、お前の華街での噂は一時期有名だったことがあつたよな…」

「…それはお前も同じだろう」  
「……………」

ニヤリと笑いながら持ちかけた言葉はバツサリ、とシエナルドの

痛い指摘によって己に返ってきた。予想外の反論に今度はレオナードが口を閉ざすが、ここで負けてはいけないと気を持ち直しながら話を続ける。敢てシエナルドの言葉は聞かなかったことにしながら

「その華街でやることやっていたにも関わらず、何も無いってのはどうなんだよ。女を可愛いと思ったことすらないのか？」

「……………さあ。どうだったか」

「おいおいおい。（マジかよ；しかも26で？…つかコイツさり気無く女を敵に回したな）」

暫し考える仕草を見せたが、やがて何も思い浮かばなかったのか。さして興味もなく応えるシエナルドに、それはそれでどうなんだと思わず心配になった。そんなシエナルドのあまりに衝撃的な事実を知りたくもなかったが知ってしまったレオナードは、本人が目の前に居るのも気にせず、重いため息を漏らす。

「はあ〜。これだとこの先思いやられるな。つか余計なお世話だったよな…」

そう小さく漏らした自問時とのような呟きが聞こえていたのか、シエナルドは再びレオナードと目を合わせると珍しく口元をあげて笑いながらそれは楽しそうに応えた。

「そんな事はない。実に役に立った、レオナード。お前には感謝しよう。クスクス」

声に出して笑う姿は男から見ても妖艶に映るが、何故かその男が浮かべている瞳の奥では新たな獲物を見つけ、絶対に逃がしはしない。といった、穏やかとは到底思えない意志が見え隠れしていた。

そんなシエナルドの類笑みにゾクリとした恐怖を覚えたレオナードは早くも己が起こした行動を深く深く後悔する。

「(すまん！サラ！…俺はとんでもない間違いを犯しちまったらしい……)」

始めは少しからかってやろう、といった悪戯心だったのにも関わらず。何故か全くと言っていいほど認めないシエナルドに意地になって、本人でも気がついていなかった気持ちが無理やり自覚させてしまった。

普段いろんな事に淡泊であるシエナルドに、こつこつと深く興味を持たせてしまったサラはこれから先、本人が希望するような穏やかな生活を送ることは出来なくなるかもしれない。長い付き合いである筈のレオナードでも、今回はやはりシエナルドがどんな行動を起すのか全く予想出来ないでいるのだ。むしろ、予想する事すらなんだか恐怖を感じさせるシエナルドに、レオナードは返す言葉もなかった。ただただ心の中でサラへの謝罪と今後の冥福を祈ることしか出来なかった。もし今この男の邪魔をすれば、例えばどんな奴であろうとも、完膚無きまでに潰して行きそうな雰囲気は漂っていた。

「今後が楽しみだ。なあ、レオナード」

今だ楽しそうに笑うシエナルドに、より一層顔色の悪くなるレオナード。そして、今後レオナードはサラとシエナルドとの間で色々暗躍する羽目になるのだった。自業自得とはいえ、いろんな意味で最強の名を持つ2人に振り回されるレオナード。そんなレオナードに周りは憐れみの目を向けるが、けして助けようなどと思つ、奇特な人は表れることはなかった。



## 自覚した恋 シエナルド side

シエナルド side

アルメリア家から戻り城へ着くと、早々に各自仕事へと動き始める。シエナルドも自室の執務室で資料を眺めていたが、見知った気配を感じとり、ノックの音と共に訪れたレオナードが執務室へと入って来る。

「よっ！シエナルド」

軽快な声で自分へと声をかけるこの男は、以前と変わらない挨拶を交わす。慣れたそれに、資料から目を離すことなくこちらも何度も繰り返し使われるお決まりのセリフを吐く。

「今度は何の用だ」

そこで普段なら「暇だった」という、これまたお決まりのセリフが飛んでくるのだが、今回は何故かそうならなかった。それに訝しんだシエナルドは視線を資料から、黙り込んだままのレオナードへと向けた。

「……………」

するとそこには、無言のまま己を見続け、まるで観察するように考え込むレオナードの姿があった。シエナルドは内心なんだと訝しながらも、黙ったままレオナードが口を開くのを待っていた。しかし、いくら待てど何も言わないレオナードに、そろそろキリがないと思い始めた頃、やっとレオナードが口を開いた。しかし…

「なあ、シエナルド。…お前サラのことが好きだろ」  
「は？」

レオナードから出てきた言葉は、なんの脈絡もない。まさに突然の事であった。あまりに唐突過ぎる言葉に、普段では考えられない程の呆けた顔で疑問を口にした。しかし、そんな己の反応にレオナードは何故か楽しそうにニヤニヤとにやけた表情を浮かべていた。先ほどまでの真面目な表情はなんだったのか、という程に表情が崩れている。

それに不快さを感じ、自然と眉間に皺が寄る。そのまま視線をにやけたままのレオナードへ向けているのも馬鹿らしくなり、手元になる資料へと再び視線を戻しながら、慥然とした態度で否定の言葉を口にする。

「何を馬鹿な…」

「おいおい。今更隠すこたあねえーだろ」

「隠してなどいない」

突然の事ではあったが、己があのアルメリアの令嬢に恋をしているなどあり得ないと思った。むしろ、己が誰かに魅かれ、想いを寄せているなど……。考えただけでも想像がつかない。それに、己には『恋』というものがイマイチ理解できないでいた。

それは、己が此れまで恋というものをした事がなかったからだろう。恋などせずとも、今まで何不自由なく過ごしてきたからだ。周りが恋だの愛だのと盛り上がる度に、シエナルドの心の中では言い知れない焦燥感とそれを馬鹿らしいと思う気持ち常在った。一人の人に夢中になり、己を見失うその様をシエナルドは愚かだと考えていたのだ。だから、己が恋をするなどありえない。と、どこかそういう確固たる意識がシエナルドの中にはあったのだ。

そんな己にレオナードは呆れたため息を吐きながら、まるで聞き分けのない子供を相手にしているかのような表情を浮かべた。

「嘘吐け。お前明らかにサラが好きだろうが」

「はっ。何を根拠に……」

言われた言葉に鼻で笑いながら、どこか馬鹿にしたような態度でレオナードに理由を求めた。それには流石のレオナードも頭にきたのか少し意地になりながら、今日一日の己の行動の可笑しさを指定してきた。

「今日一日俺がサラに絡む度に眉間に皺寄せるは、名前を呼べば機嫌が悪くなるは、俺との会話に無理やり入って来るは……。理由は十分じゃねえか。これでサラを好きじゃないってどうして言える」

「……………」

指摘された言葉は確かに、此れまででは考えられない己の奇行な行動。何気なく今日一日の行動を振り返りながら、次々と思い出される場面をよくよく思い出していく。考えている途中でレオナードが何か騒いでいたような気がしたが、そんな事は特に気にせず己の思考に没頭する。

確かに、アルメリアに行つてからの己の行動や、感情の変化が多々あった。はじめは、メイドを助けた際の力の凄さに驚かされ。そして、その使用人たちからの信頼の深さにも驚かされた。アルメリア嬢は例え使用人や平民であろうと、誰であれ平等に人として扱っていた。そんな主人に使用人たも誇りを持って仕えているのだろう。我々を案内していた男の使用人やその他の執事やメイドを含め、数



は少ないが、仕事の早さや対応の仕方、タイミング、そのどれもが文句のつけ様がない程の対応だった。そして、そんな使用人にもアルメリア嬢の雰囲気はどこか柔らかく、穏やかだ。

それを少し羨ましいと感じたのは確かだ。殺伐とした軍の中で過ごしてきた己たちには無い、日常の『暖かさ』。その中心となつてるのが、アルメリア嬢だ。彼女の発する穏やかな空気、柔らかい笑顔、そしてまるで樹木のように優しく包み込んでくれる温かさ。そして、ふとした瞬間に瞳に宿る芯の強さと知的さは、どこか神秘的ですつと眺めていたくなる魅力を含んでいた。己の容赦のない言葉にも、強い意志を持って応えた姿はどこか頼もしくも思えた。

そこら辺のご令嬢方とは違い、我等に媚びることも、欲に塗れることもない姿は驚くと共にとても新鮮だった。そこからは、知らず知らず目の端でいつも彼女を捉え、姿が見えなければ無意識に探すうとする己に不思議な感情が浮かんでくる。

そこまで考えて、シエナルドはハツとした。先ほどのレオナードの言葉が一つ一つ思い浮かんでは、頭の中で何度も響き、ループしていく。そして、……己が恋をしているのだと気が付いた。

「（これが、……恋）」

自覚した途端に感じる不思議な高揚感と喜び。それと同時に心の空虚さと黒くて醜い嫉妬が渦を巻いていく。そして、思い出されていく数々の想い。

レオナードが彼女と親しく話す度に眉間に皺が寄ったのは、自分も彼のように彼女と話をしてみたかったから。彼が彼女の名前を『サラ』と呼ぶ度に、胸が締め付けられるのは、己に与えられない権

利を彼だけが得ているように感じたから。2人の会話に無理やり入りこんだのは、己では分からぬ秘密が2人の間にあるのだと感じとったから。それが、まるで特別なのだと言われているようで、それがどうしようもなく嫌で嫌で堪らなかつたから。

こうして、考えると自分はどれだけ滑稽な事をしていたのか。しかも、初めて自覚した気持ちは嫉妬した相手に気付かされる羽目になるなど……正直、滑稽過ぎて笑えない。

アルメリア嬢の事を抜きにすれば、レオナードは己にとって掛替えの無い仲間の一人だ。しかも、実力も己とそう変わらず、更にお互いが同じ騎士団の団長を務めていることもあり、他の誰よりも気が知れていた。……本当に彼女の事を抜きにすれば！（強調）これほど、理解しあえる者はそう居ない。

自分の気持ちに気付いたところで思考の波から浮上し、レオナードを向いたところで、彼はシエナルドに向かって、まるで出来の悪い子を嘆くような仕草で頭を押さえていた。その姿に、先ほどまでこの男のことを褒めて（？）いた自分に、いきなりこの態度はどうなんだ、と少しむっとなつた。

「なんだ、その反応は」

「いや、だつてお前……もうすぐ26だろ。恋の1つや2つした事くらい」

「……………」

先ほどまでの機嫌の悪さはレオナードのこの言葉で即座に粉碎し、さり気無い動作でレオナードから視線を逸らそうとした。しかし、それに目敏く気付いたレオナードは「ありえないものを見た」といった風に見開き、次の瞬間にはそれが爆発したかのように叫び

だした。

「さて！ちょっとまって！…何だその無言は。まさか、26になってまで初恋すらまだだったなんて言わないよな？26だぞ？流石に恋くらいしたことあんだろ！！」

「……………」

レオナードの叫び声虚しく、正について先ほど初恋なるものを自覚したシエナルド。よって、これ以前に恋などしたことがあるわけもなく。またも、無言で返って来た返事に、愕然と頂垂れたレオナードは机に手をやり、少しくぐもった声で己の容姿について問われる。それに正直に答えながら、漸く落ち着きを取り戻した彼に、再度問われる。

「確か俺の記憶が正しければ、お前の華街での噂は一時期有名だったことがあったよな…」

「…それはお前も同じだろう」

「……………」

華街の事を持ちだされ、少し苦い気持ちになりながらも、人の事は言えないと、レオナードにも同じ事を言っただけ。第一、26にもなるうという男だ。それなりに色々あるものだ。少々荒れた時期もありはしたが、今ではそんな事もない。暫くすると、指摘されて黙りこんでいたレオナードはどうやら復活したのかそのまま話を続けた。

「その華街でやることやってたにも関わらず、何も無いってのはどうなんだよ。女を可愛いと思ったことすらないのか？」

「……………さあ。どうだったか」

「おいおいおい。」

レオナードの問いに、今までの女を思いだそうとしたが、誰一人として浮かんで来ない顔に、早々に見切りをつけ、興味もなく応えた。その様子に、さらに呆れた顔で重いため息を吐くレオナードは続けて、ぼそつと小さい声で呟いた。

「はあ〜。これだとこの先思いやられるな。つか余計なお世話だったよな…」

そんな呟きが聞こえたシエナルドは、穏やかとは到底言えない笑みを浮かべながら、嘆いている様子のレオナードへと贅辞の言葉を口にした。

「そんな事はない。実に役に立った、レオナード。お前には感謝しよう。クスクス」

その言葉に段々顔色が悪くなっていくレオナード。しかし、シエナルドにとつては、そんな様子すら何故か今はとても愉快に思えた。ずっとモヤモヤして、定まらなかつた己の気持ち。これが恋なのだと気付かせたレオナード。…どんなに後悔した処で、既に手遅れ。自覚してしまった気持ちは、最早シエナルド本人にも止める事は出来ない。それが、初めての恋ならば尚更。…止める術を持たない己に、与えられた選択は1つだけだ。

そして、思い浮かべるは先ほどまでのアルメリア嬢の姿。

どうしたら、彼女をこの手中に収めることが出来るのだろうか。どのようにしたら、彼女は此方に振り向くのだろうか。出来ることならば振り向いて欲しいと思う。しかし、今日一日彼女と触れ合っただけで少し分かった事がある。

穏やかで柔らかく、そして強くもある彼女だが、それとは別に彼

女をどこか遠くに感じる事があつたのだ。同じ空間に居るにも関わらず、彼女だけが何処か我々とは次元の違った処に居るような気がして、どこか落ち着かない。ふとした瞬間に、目の前から忽然と消えてしまうのではないかと思う程に。

だが、そんな事を今更気になどしない。それに、最早己に定められた標的に、逃げ道など与えはしないのだから。勿論逃すつもりも他の誰かに奪われるつもりも毛頭ありはしない。逃げられるものならば逃げてみるがいい。だが、一度でも捕まれば決して逃れられないのだと、理解すればいい。その芯の強さを宿した瞳が自分意外の男を映すことも、自分以外の男に心奪われる事も許しはしない。

「……映したが最後。その男ともう一度対面出来るなどと夢にも思わぬ事だ。　フフ。」

「今後が楽しみだ。なあ、レオナード」

何もそう慌てることはない。これからいくらでも機会はある。なにせ、これから共に過ごす日々が始まるのだから。

「（ゆっくりと、だが確実に追いつめて行こうではないか。…なあ、サラサ・セナ・アルメリア）」

これから始まる日々に想いを馳せながら、シエナルドは笑みを更に深く浮かべ、今も屋敷で我々の帰りを待っているであろうサラサの姿を思い浮かべるのだった。



自覚した恋 シエナルド side (後書き)

わっほい(\*ノ、\*)シエナルドさんが何やら鬼畜に…  
むしろ独占欲が強くなりそう；

更には、しつこい男になりそうだ……

(こんなはずではなかったのだが…、)、(あはは)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8610w/>

---

偉大なるサラ様の恋愛事情

2011年10月21日07時56分発行